

仙台市文化財調査報告書第277集

壇 腰 遺 跡

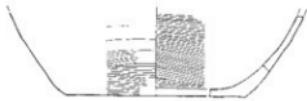
－発掘調査報告書－

2004. 3

仙台市教育委員会

正誤表

『埴輪遺跡』仙台市文化財調査報告書第277集

			誤	正
5頁	第4図	東西座標	X	Y
9頁	第8図	3左(内面)		
22頁	第22図	8		

仙台市文化財調査報告書第277集

壇 腰 遺 跡

－発掘調査報告書－

2004. 3

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃から多大なご協力を頂き、まことに感謝にたえません。

本市南東部に位置する中田地区は古くから旧国道沿いに町並みが続き、その周辺には豊かな田園風景が広がる近郊農業地帯として発展してきました。近年、当地域は急速に市街化が進み、ベッドタウンとして変わりつつあります。今回の発掘調査も、こうした流れの中で実施されたものです。古墳、奈良、平安時代の集落跡や中世の堀跡が発見され、地域の歴史を再考する貴重な成果が得られました。

先人の残した貴重な文化財を保護し、保存活用を図りつつ後世に継承していくことは私たちに課せられた責務と考えております。

本書はこのような調査成果を収録したものです。多くの方々に積極的に活用され、学術研究の場で役立てれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成16年3月

仙台市教育委員会

教育長 阿 部 芳 吉

例　　言

1. 本書は宅地造成に伴う埴腰遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会のもとに、株式会社玉川文化財研究所が調査を行った。
3. 本書の作成・編集は、仙台市教育委員会文化財課 渡部弘美、株式会社玉川文化財研究所 戸田哲也・小松 清・玉川久子が行った。
4. 本書の執筆は、渡部弘美の責任と指導のもとに、株式会社玉川文化財研究所が行った。
- 株式会社玉川文化財研究所内の分担
・第Ⅰ章、第Ⅱ章第5節、第Ⅲ章……………小林義典
・第Ⅱ章第1～4節……………伊東基吉
5. 調査と報告書作成にあたり次の方々のご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(顛不同・敬称略)
祐治一夫(土地所有者)、大和ハウス工業(株)仙台支店
6. 本書に係わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書に使用した座標系は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第X座標系を基準とし、遺構図面の方位矢印は座標北を指す。
2. 調査区の区分はX軸に北から南に算用数字1～18、Y軸には西から東に向けアルファベットA～Pを付した。
調査北西隅E-4交点の座標値はX=-201040m、Y=4700mである。各区の呼称はX・Y軸に付したアルファベット・算用数字との座標交点の第4象限(南東側)をそれぞれ指す。
3. 本書に使用した挿図縮尺は、遺構図関係－遺構配置1/500、堅穴住居跡・溝跡・掘跡が1/60、堅穴住居跡カマF1/30、掘立柱建物跡・土坑1/40、遺物 1/3である。
4. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
S I 堅穴住居跡 S B 掘立柱建物跡 S D 溝跡・掘跡 S K 土坑
5. 土師器内面の黒色処理は網掛けして表現した。
6. 出上遺物観察表中の()内数値は推定値を示す。
7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000「仙台東南部」を1/30,000に、都市計画図については仙台市都市計画基本図1/2,500「X-Q E71-1・X-Q E71-1」を1/3,000に縮小した。
8. 本報告書の土色の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務所・日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』1994年版を使用した。

目 次

序 文

例 言

凡 例

第Ⅰ章 調査の概要.....	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査の経緯と経過	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第4節 層 序	4
第Ⅱ章 検出された遺構と出土遺物	5
第1節 壘穴住居跡	6
第2節 挖立柱建物跡	33
第3節 溝 跡	33
第4節 上 坑	36
第5節 墓 跡	38
第Ⅲ章 ま と め	42
報告書抄録.....	卷末

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (1:3,000)	2	第21図 9号住居跡 (S I 9) 及びカマド・床下土坑	21
第2図 周辺の遺跡 (1:30,000)	3	第22図 9号住居跡 (S I 9) 出土遺物 (1)	22
第3図 土屢図 (1:30)	4	第23図 9号住居跡 (S I 9) 出土遺物 (2)	23
第4図 道構造図 (1:500)	5	第24図 9号住居跡 (S I 9) 出土遺物 (3)	24
第5図 1号住居跡 (S I 1)	6	第25図 10号住居跡 (S I 10)	26
第6図 1号住居跡 (S I 1) 出土遺物	7	第26図 11号住居跡 (S I 11) 及びカマド	27
第7図 2号住居跡 (S I 2) 及びカマド	8	第27図 11号住居跡 (S I 11) 出土遺物	28
第8図 2号住居跡 (S I 2) 出土遺物	9	第28図 12号住居跡 (S I 12) 及びカマド	29
第9図 3号住居跡 (S I 3) 及びカマド	10	第29図 12号住居跡 (S I 12) 出土遺物	30
第10図 3号住居跡 (S I 3) 出土遺物	11	第30図 13号住居跡 (S I 13) 出土遺物	31
第11図 4号住居跡 (S I 4) 及びカマド	12	第31図 13号住居跡 (S I 13) 及びカマド	32
第12図 4号住居跡 (S I 4) 出土遺物	13	第32図 1号独立柱建物跡 (S B 1)	33
第13図 5号住居跡 (S I 5) 出土遺物	13	第33図 1号溝跡 (S D 1)	34
第14図 5号住居跡 (S I 5) 及びカマド	14	第34図 1号溝跡 (S D 1) 出土遺物	35
第15図 6・8号住居跡 (S I 6・8)	15	第35図 1~3号土坑 (SK 1~3)	37
第16図 6号住居跡 (S I 6) カマド	16	第36図 1号土坑 (SK 1) 出土遺物	37
第17図 6号住居跡 (S I 6) 出土遺物	17	第37図 1号溝跡 (S D 2) 出土遺物	39
第18図 7号住居跡 (S I 7) カマド	18	第38図 1号堀跡 (S D 2)	40
第19図 7号住居跡 (S I 7) 出土遺物	18	第39図 1号堀跡 (S D 2) C~E-8・9号堆積土 及び断面図	41
第20図 8号住居跡 (S I 8) 出土遺物	19		

表 目 次

第1表 1号住居跡 (S I 1) 出土遺物観察表	7	第9表 9号住居跡 (S I 9) 山土遺物観察表	25
第2表 2号住居跡 (S I 2) 出土遺物観察表	9	第10表 11号住居跡 (S I 11) 出土遺物観察表	28
第3表 3号住居跡 (S I 3) 出土遺物観察表	11	第11表 12号住居跡 (S I 12) 出土遺物観察表	30
第4表 4号住居跡 (S I 4) 出土遺物観察表	13	第12表 13号住居跡 (S I 13) 出土遺物観察表	31
第5表 5号住居跡 (S I 5) 出土遺物観察表	13	第13表 1号溝跡 (S D 1) 出土遺物観察表	34
第6表 6号住居跡 (S I 6) 出土遺物観察表	17	第14表 1号土坑 (SK 1) 出土遺物観察表	37
第7表 7号住居跡 (S I 7) 出土遺物観察表	18	第15表 1号堀跡 (S D 2) 山土遺物観察表	39
第8表 8号住居跡 (S I 8) 出土遺物観察表	19		

図 版 目 次

図版1	道跡遺景（上空東から）	図版9	1号溝跡（SD1）全景（南東から）
	道跡全景（上空から）		1号溝跡（SD1）堆積土状態
図版2	1号住居跡（SI1）全景（西から）		1号溝跡（SD1）上～中層土部出土状態
	1号住居跡（SI1）北東隅部分出土状態		1号溝跡（SD1）堆積土2層土師器山土状態
図版3	1号住居跡（SI1）北西隅部鉄製鋸轆車出土状態		1号溝跡（SD1）下層土師器环出土状態
	2号住居跡（SI2）全景（南東から）	図版10	1・2号土坑（SK1・2）全景（東から）
	2号住居跡（SI2）カマド周辺の遺物出土状態		3号土坑及びK-7区周辺の遺構兼山状態
	2号住居跡（SI2）カマド		（北から）
	3号住居跡（SI3）全景（西から）	図版11	1号堀跡（SD2）西側及び堆積土状態（東から）
図版4	4号住居跡（SI4）全景（北東から）		1号堀跡（SD2）北法面犬走り（南西から）
	5号住居跡（SI5）全景（北東から）		1号堀跡（SD2）北法面犬走り・溝（西から）
図版5	4号住居跡（SI4）堆積土状態		1号堀跡（SD2）東側（東から）
	5号住居跡（SI5）堆積土状態	図版12	1号住居跡（SI1）出土遺物
	4号住居跡（SI4）カマド		2号住居跡（SI2）山土遺物
	5号住居跡（SI5）カマド		4号住居跡（SI4）出土遺物
図版6	6～8号住居跡（SI6～8）全景（南から）		5号住居跡（SI5）出土遺物
	6号住居跡（SI6）カマド	図版13	3号住居跡（SI3）出土遺物
	6号住居跡（SI6）土師器環山土状態		6号住居跡（SI6）出土遺物
	6号住居跡（SI6）土師器環出土状態		7号住居跡（SI7）出土遺物
	6号住居跡（SI6）須恵器瓶出土状態		8号住居跡（SI8）出土遺物
図版7	9号住居跡（SI9）全景（西南西から）	図版14	9号住居跡（SI9）出土遺物（1）
	9号住居跡（SI9）カマド	図版15	9号住居跡（SI9）出土遺物（2）
	9号住居跡（SI9）南東隅部縛集積状態	図版16	11号住居跡（SI11）出土遺物
	9号住居跡（SI9）遺物出土状態（真上から）		12号住居跡（SI12）出土遺物
	9号住居跡（SI9）遺物出土状態（南西から）		13号住居跡（SI13）山土遺物
図版8	11～13号住居跡（SI11～13）全景（南東から）	図版17	1号溝跡（SD1）出土遺物
	11号住居跡（SI11）カマド		1号堀跡（SD2）出土遺物
	12号住居跡（SI12）カマド		1号土坑（SK1）出土遺物
	12号住居跡（SI12）土師器環出土状態		
	13号住居跡（SI13）カマド		

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査要項

遺跡名 墓腰遺跡（宮城県遺跡番号01105 仙台市文化財登録番号C-139）

所在地 仙台市太白区中田七丁目129他

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）

調査担当 調査係 主査 佐藤甲二

調査係 主査 渡部弘美

調査員 小林義典（株式会社玉川文化財研究所）

調査補助員 伊東甚古（株式会社玉川文化財研究所）

調査期間 平成15年8月25日～同年10月23日

調査面積 約1,000m²

第2節 調査の経緯と経過

平成15年2月、仙台市太白区中田七丁目129他に計画された造成工事に伴い、事業主である柿沼一夫氏より仙台市教育委員会文化財課に、事業地内に存在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。仙台市教育委員会では、当該地が墓腰遺跡の遺跡範囲内であることから確認調査を実施することとし、同年2月24・25日に宅地内道路計画範囲内に9箇所の確認トレンチ調査を行った。その結果、古墳時代から古代の堅穴住居跡と中世と考えられる溝跡等の遺構・遺物が検出されたことから、仙台市教育委員会は柿沼氏に対して、事業にあたっては本発掘調査が必要である旨通知した。

その後、協議を重ね平成15年8月4日付で、柿沼氏より発掘届（教生文2-104）が提出された。これを受け仙台市教育委員会は、同年8月25日から宅地内道路及びその進入路部分の約1,250m²を対象とする現地調査に入った。

発掘調査は平成15年8月25日から同年10月23日までの期間実施した。調査はまず宅地内道路への導入部となる調査範囲南側のB・C-10～17区の幅2m、長さ37mの確認調査から開始し、遺構が検出された部分については道路幅6mの拡張調査を行った。

宅地内道路部分については南から北、東側方向へと順次遺構確認を行い、工区を西側の南と北、中央部、東側の4工区に分け、宅地内道路埋設管工事に先行するかたちで発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代後期後半の堅穴住居跡3軒・溝跡1条、奈良時代の堅穴住居跡4軒・土坑2基、平安時代の堅穴住居跡5軒、奈良～平安時代のいずれかに該当する堅穴住居跡1軒・掘立柱建物跡1棟・土坑1基、中世鉢跡（前田鉢跡）の南側外周を区画する東～西方向の掘跡1条等を確認した。

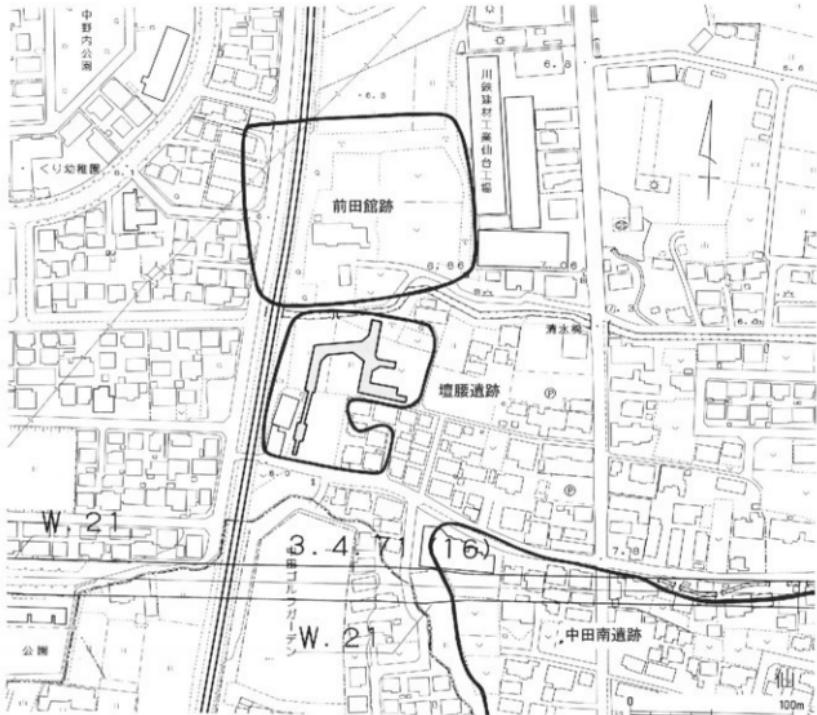
以上をもって、平成15年10月22日に調査を完了した。翌23日、機材を撤収し、全ての現地作業を終了した。

第3節 遺跡の位置と環境

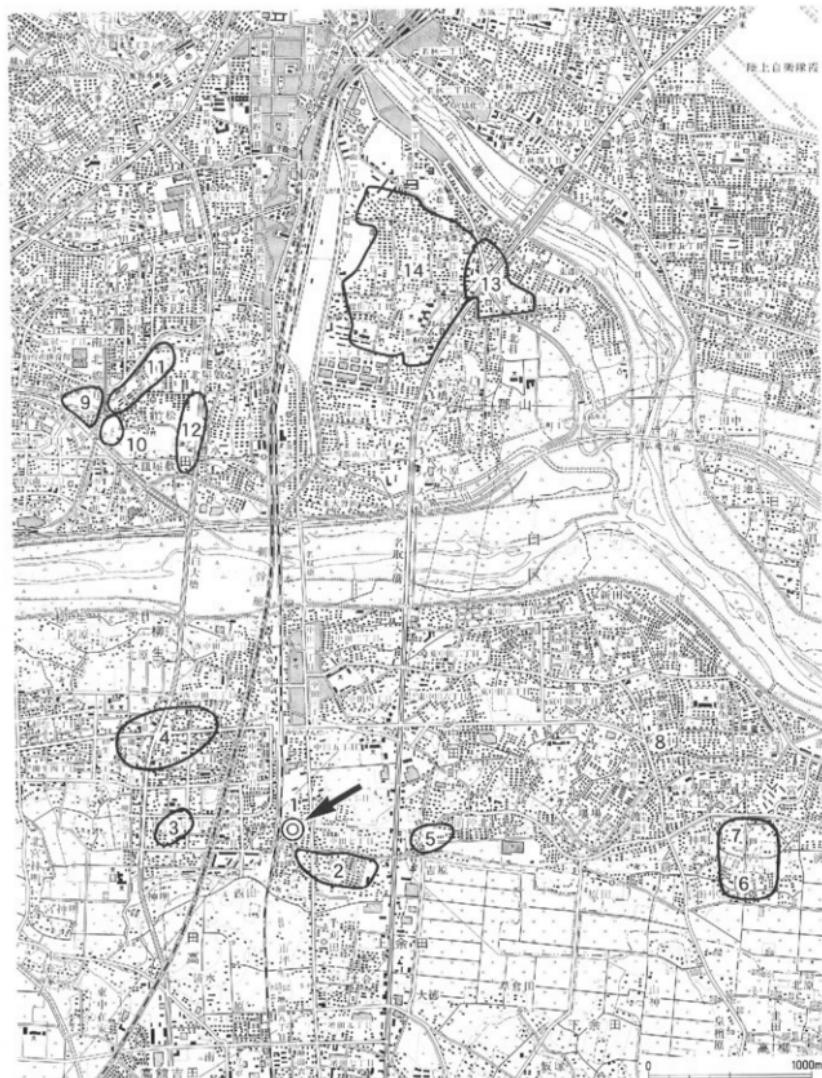
本遺跡は仙台市太白区中田七丁目129番を代表地番として所在し、JR東北本線「南仙台駅」の南方0.6km、名取川下流域右（南）岸、標高8m程度の自然堤防上に立地する。遺跡範囲の北側には「前田館跡」との境界となる小河川清水川（鰐）が東流下する。また、当該地は仙台市の南東部に位置する太白区内でも最南端部に当たり、遺跡南側の東～西方向の市道の南側は名取市との境界となっている。

発掘調査以前の現況は、市道からの取付道路部分が月極駐車場、宅地造成範囲は住宅地に囲まれた畠地・休耕地であった。当該地周辺はかつて豊かな田園地帯が広がり、稻・蔬菜類を生産する近郊農業地帯として発展してきた経緯があるが、都市交通網の拡充・発達、新幹線の導入等により近年では仙台市街のベッドタウンとして急速に都市化が進行している地域である。

本遺跡周辺は仙台市内でも遺跡数の多い地域として知られる地域である。第2図に本遺跡周辺の代表的な遺跡を示した。いずれも河川流域の自然堤防や後背湿地等に分布し、本遺跡周辺の名取川右岸（1～8）では弥生時代～中世の複合遺跡、名取川左岸（9～14）では縄文時代～中世及び近世の複合遺跡となる傾向が認められ、断続的であるにしても遺跡が同一地点に時代を異にして営まれた地域であったことが看取できる。



第1図 調査区位置図 (1:3,000)



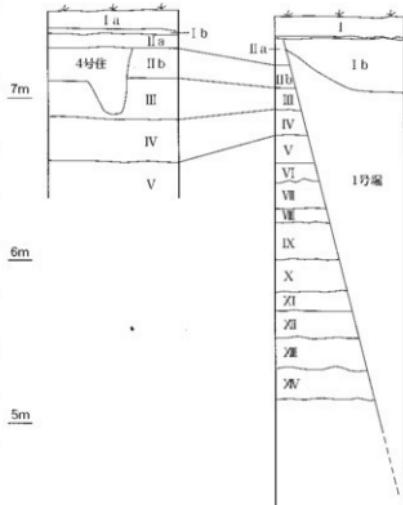
←本遺跡 1. 前田館跡 2. 中田南遺跡 3. 梁遺跡 4. 安久東遺跡 5. 後河原遺跡 6. 戸ノ内遺跡 7. 四郎丸館跡
8. 中田姫中遺跡 9. 下ノ内遺跡 10. 伊古田遺跡 11. 六反田遺跡 12. 王ノ壇遺跡 13. 北目城跡 14. 郡山遺跡

第2図 周辺の遺跡 (1:30,000)

第4節 層序

発掘調査区内での十層堆積観察を4号住居跡周辺のI~4区、1号塙跡東側のN~9区で行った。I~4区ではI~IV層を、N~9区の1号塙跡北側法面ではI~XIV層までを分層し、住居跡や塙跡等の遺構構築面及び遺構確認面の対比検討を行った。遺構構築面については、塙跡はIIa層上面から、住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑等はIIb層上面から切り込まれているが、調査時にはこの面での遺構確認は難しく、IIb層下部~III層上面が遺構確認面となつた。III層以下は砂質シルト・砂層・ラミナの発達した砂層・砂質シルト・泥炭化した有機質腐植土等の五層が形成され、河川要因による土層堆積状態を示していた。以下、I~XIV層を説明する。

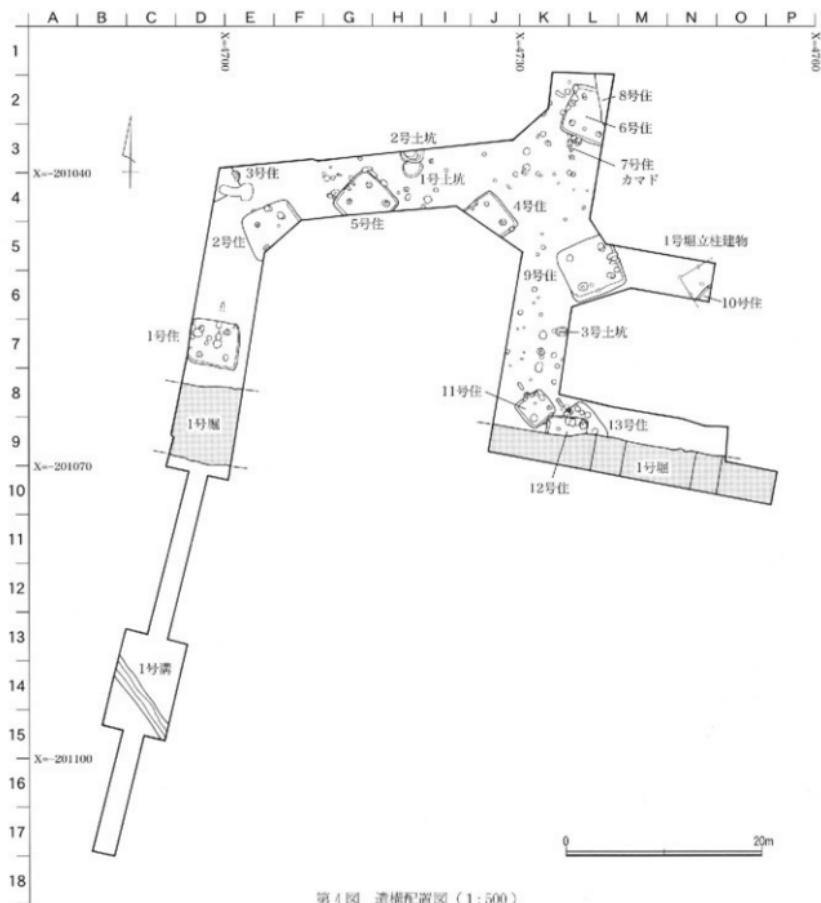
- I a層** 暗灰色 (10YR6/1) 現地表・耕作土。粘性欠き、締まり強い。層下端に2~3mmの酸化鉄の硬い薄層を形成する。乾燥するとクラックを生じる。ややシルト味。
- I b層** 灰黄褐色 (10YR6/2) 調査範囲の南東側に分布する。粘性欠き、締まり強い。径1mmの白色粒子を微量含む。ややシルト味。
- II a層** 暗灰色 (10YR5/1) 粘性やや欠き、締まり強い。径10mm大の黄褐色ブロックを斑紋状に少量含む。IIb層に比べ黄色味が強い。シルト味強い。奈良・平安時代の遺構を被覆し、塙跡の確認面である。
- II b層** 暗褐色 (10YR4/1) 粘性・締まり強い。径10~20mm大の黒褐色ブロックを斑紋状に少量含む。シルト味強い。上端面は奈良・平安時代の遺構掘り込み面である。
- III 層** にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性・締まり強い。径10mm前後の暗褐色ブロックを少量含む。砂質シルトで、シルト味強い。調査時の遺構確認面は本層最上面及びIIb層下部である。
- IV 層** 黒褐色 (10YR3/1) 粘性強く、締まりやや欠く。砂質シルトで、シルト味強い。径20mm前後のマンガン斑を多量含む。酸化して色調が黒ずみやすい。
- V 層** 灰褐色 (7.5YR6/2) 粘性・締まり強い。シルト味強い。径5mm程度のマンガン斑を多量、径20mm大の暗灰色ブロックを少量含む。
- VI 層** 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘性・締まり強い。シルト味強い。径5mm大のマンガン斑を多量に含む。層下端は凹凸面を呈する。
- VII 層** 灰白色 (10YR7/1) 粘性・締まり強い。シルト味強い。径20mm大のマンガン斑を多量に含み、層下端に特に濃集する。
- VIII 層** 浅黄色 (2.5YR7/4) 粘性・締まり強い。シルト味強い。径20mm大のマンガン斑多量、管状斑鉄含む。
- IX 層** 暗灰色 (10YR4/1) 粘性・締まり強い。砂質シルトで、シルト味強い。
- X 層** 暗灰色 (10YR6/1) 粘性・締まり強い。砂質シルトで、シルト味強い。
- XI 層** 暗緑灰色 (5G3/1) 粘性・締まり強い。砂質シルト。還元著しく、有機質多い。
- XII 層** 橙色 (7.5YR6/6) 粘性欠き、締まり強い。砂質。全体的に酸化度強いラミナの発達が著しい。
- XIII 層** 青灰色 (5BG6/1) 粘性・締まり強い。砂質シルトで、シルト味強い。還元進む。
- XIV 層** 浅橙色 (7.5YR8/6) 粘性・締まり強い。砂質シルトで、シルト味強い。全体的に酸化度強いラミナの発達が著しい。



第3図 上層図 (1:30)

第Ⅱ章 検出された遺構と出土遺物

本遺跡は古墳時代後期から平安時代前半まで断続的に存続した集落跡が中心となる。各時代における遺構の検査状況は、古墳時代後期後半の竪穴住居跡3軒・溝跡1条、奈良時代の竪穴住居跡4軒・土坑2基、平安時代の竪穴住居跡5軒、奈良～平安時代いずれかに該当する竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡1棟・土坑1基、それに中小のピット及び中世前田館跡に関連したと推定できる堀跡1条が検出された。古墳時代後期～平安時代の住居数に突出する部分は認められず、また遺構間における重複は極めて少なく、時期毎の分布状態は比較的散漫であった。遺物は竪穴住居跡から出土した土器器・須恵器を中心となるが、9号住居跡以外は意外と少ない。



第4図 遺構配置図 (1:500)

第1節 穂穴住居跡

1号住居跡 (S I 1) (第5図、図版2)

位置 調査区西側、発掘区ではD・E・6・7区に位置する。

遺存状態 床面付近まで大きく削平を受けているが、平面的にはほぼ全体を検出した。

平面形 圓丸方形と考えられる。

規模 南北4.55m、東西5.05mであり、確認した床面積は約16.6m²である。

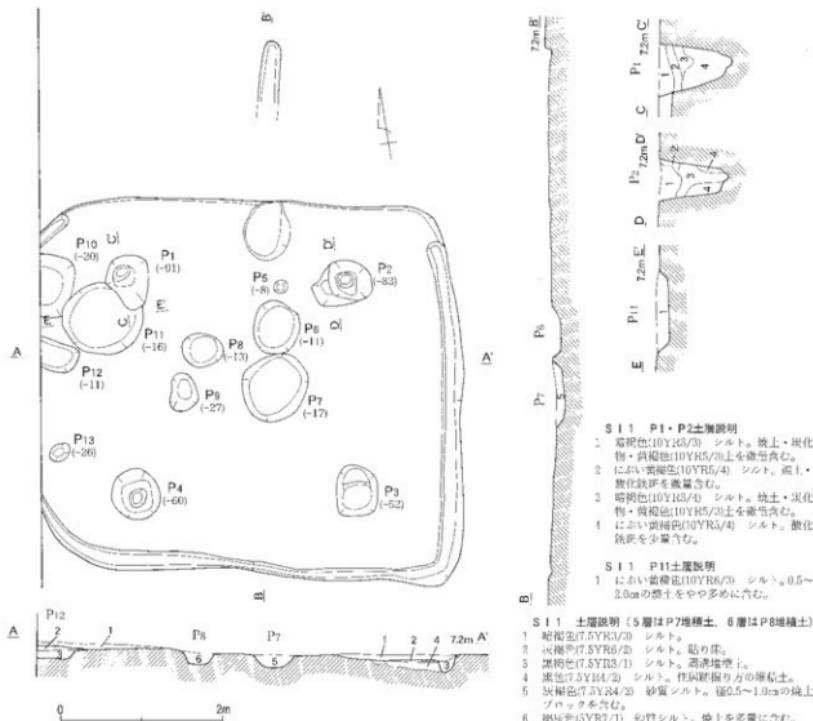
主軸方向 カマドを基軸とするとN-10°-Eを測る。

壁 基本土層Ⅲ層を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。残存する壁高は遺存状態の良好な箇所で4cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、竪穴の中央は基本土層Ⅲ層を床面とし若干硬化するが、壁の周辺は貼り床が施される。

カマド 後世の搅乱によって火床面と煙道の先端部分のみの検出となった。煙道部分は壁外から2.0m出ている。

柱穴 ピットは13穴検出した。その内P₁～P₄は住居跡の対角線上に位置し、深さもほぼ一定で、断面では柱痕跡は確認できなかったが、底部に小ピットを確認したため柱穴と考えられる。



第5図 1号住居跡 (S I 1)

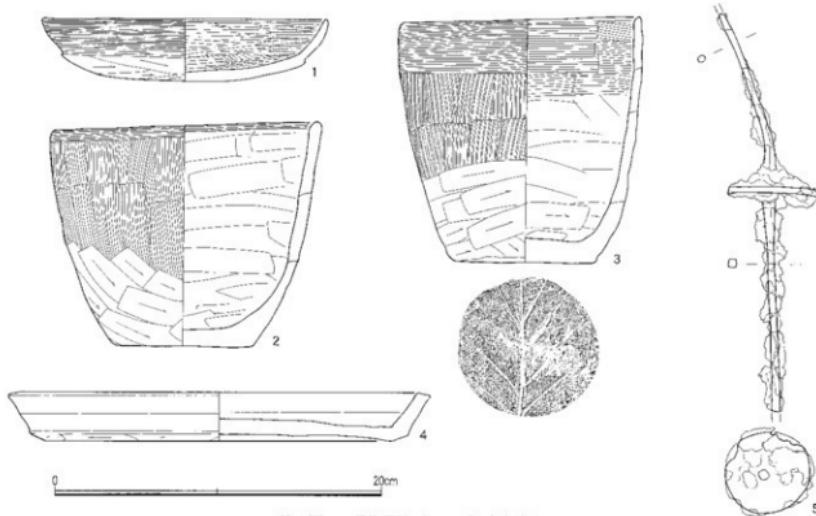
周 溝 調査区外のため西壁は確認できなかったが、北壁を除きほぼ全周すると思われる。規模は幅15~20cm、深さ7cm、断面形はU字状を呈する。

堆 積 土 1層確認した。基本土層のIIa層を主体とする堆積土であるが、その大半が後世の削平を受けていたため堆積状態は不明である。

出土遺物 (第6図、第1表、図版12)

堆積土中・床面・ピット内から土師器及び鉄製品が出土した。その中で図示し得たのは、土師器壺1点・同鉢2点・須恵器盤1点・鉄製鋤頭車1点である。この他に土師器壺の破片2点・同盤の破片67点が出土した。土師器壺・鉢とともに非クロロ成形である。図示し得た資料を見ると、1の土師器壺は底部が丸底状を呈し、口縁部との境に棱を持ち、口縁部が内湾しながら立ち上がる、国分寺下層式に比定される資料である。2・3の土師器鉢は最大径が口縁部にあり、外傾しながら立ち上っている。また、4の須恵器盤は、口縁部がロクロナデで、底部外周をヘラケズリ調整している。

時 期 土師器壺・鉢の形態及び須恵器盤の出土から8世紀前半と考えられる。



第6図 1号住居跡 (S I 1) 出土遺物

第1表 1号住居跡 (S I 1) 山土遺物観察表 (第6図、図版12)

番号	種類	層位	外観	内面	残存	寸法(cm)			万用回数	台録番号	
						11道	底深	高さ			
1	土師器 壺	床面	ココナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色絞り	口縁45.6 体高36	37.4	—	3.9	12	C-001	
2	土師器 鉢	床面	ココナデ ハケメ ヘラケズリ	ココナデ ヘラナデ	口縁45.1/2 体高5.3 底盤直徑	15.0	8.8	13.8	—	C-002	
3	土師器 鉢	床面	ココナデ ハケメ ヘラケズリ	ヘラナデ ヘラケズリ	口縁45.1/2 体高直徑11	14.6	8.6	16.1	12	C-003	
4	須恵器 盤	床面	ロクロナデ 一定方角のヘタ	ロクロナデ ケズリ	1/2周	(25.0)	21.2	3.0	12	E-016	
番号	種類	層位	特徴	現存長 (cm)	底径 (cm)	軸 径 %	厚 さ (mm)	子 底 径 (cm)	重 量 (kg)	万用回数	台録番号
5	鉄製品 鋤頭車	下層	頭蓋が方形	24.3	5.5	—	0.4	0.6	94.2	12	N-001

2号住居跡 (S I 2) (第7図、図版3)

位 置 調査区北西、発掘区ではE・F-4・5区に位置する。

遺存状態 南側が調査区外となるが、平面的には全体の約3/4を検出した。しかし造構確認面から床面まで非常に浅く、遺存状態は良好とはいえない。

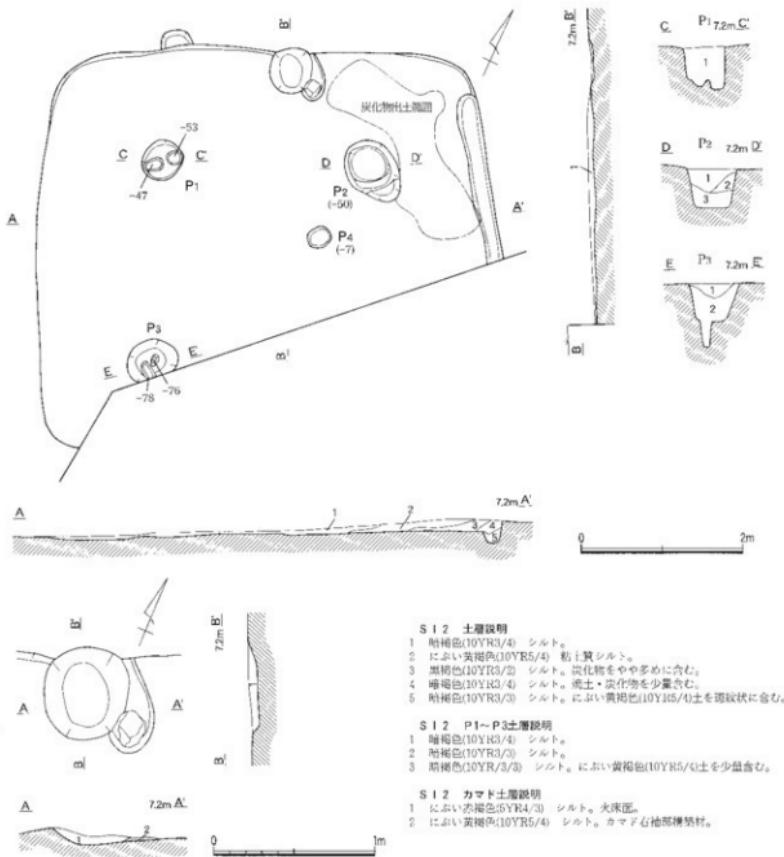
平 面 形 南側が調査区外となるが、隅丸方形と考えられる。

規 模 南北4.85m、東西5.62mを測る。

主軸方向 カマドを基準とすると、N-25°-Wである。

壁 基本上層Ⅲ層を壁とし、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。残存する壁高は12cmである。

床 面 Ⅲ層を床面とする。窓穴の中央がより硬化し、若干の凹凸がある。



第7図 2号住居跡 (S I 2) 及びカマド

カマド 北壁中央よりやや東寄りに位置する。遺存状態が良好ではないため断定はできないが、北壁を若干掘り込んで構築されている。焚口から煙道の立ち上がりまで48cm、両袖部の最大幅と焚口幅は不明、左袖部は削半されて遺存しないが、右袖部は芯材として石材が埋め込まれていた。火床面はほぼ平坦で、奥壁寄りで緩やかに立ち上がる。

柱穴 4穴のピットを検出した。P4以外は竪穴のはば対角線上に位置し、また掘り方の深さも一定であることから主柱穴と考えられる。

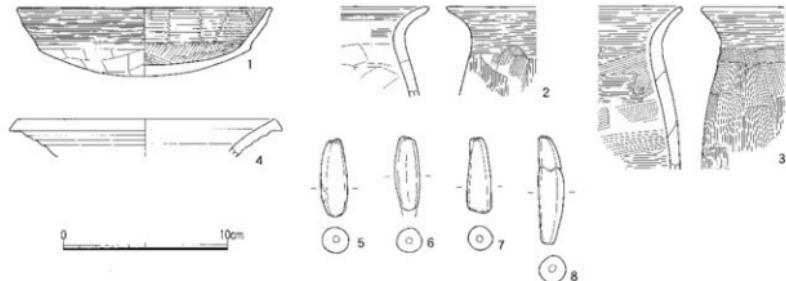
溝 東壁に沿ってのみ確認した。規模は幅約20cm、深さ14cm内外、断面形はU字型を呈する。

堆積土 5層に分層され、東側ではレンズ状の堆積が観察される。

出土遺物 (第8図、第2表、図版12)

堆積土中・床面・カマド内・カマド掘り方等から土器器、須恵器、環、上鍾等が出土した。その中で図示したのは、土器器环1点・同窓2点、須恵器壺または瓶1点、上鍾4点である。その他に土器器环の破片6点・同窓の破片156点、器種不明の上鍾49点、須恵器环の破片3点、環5点が出土した。土器器环・窓はすべて非クロコ形である。図示した1の上鍒器环は、底部が丸底状を呈し、口縁部との境に稜を持つ円分寺下鍒式に比定される資料である。2・3の上鍒器環は、胴部が若干張る長胴形の窓である。4の須恵器は壺または瓶の口縁部と推定される。

時期 土器器环の形態から8世紀前半と推定できる。



第8図 2号住居跡 (S I 2) 出土遺物

第2表 2号住居跡 (S I 2) 山手遺物観察表 (第8図、図版12)

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法寸量(cm)			万葉図版	登録番号	
						口径	底径	高			
1	土器器環	床面	ココナゲ ヘラケズリ	ヘラヘガキ→器底熱理	1縦部2/3 底部は研磨	15.0	—	4.2	12	C-001	
2	土器器環	下層	メコナゲ ハケメ	メコナゲ ヘラナテ?	1縦部~周部小片	—	—	—	—	C-005	
3	土器器窓	下層	ココナゲ ハケメ	メコナゲ ヘラナテ	口縁部~腰部小片	—	—	—	12	C-006	
4	須恵器	下層	ロクロナブ	ロクワナブ	口縁部1/5	(15.8)	—	—	12	E-001	
番号	種別	層位	特徴		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	孔 径 (cm)	万葉図版	登録番号
5	土鍒	下層	ほぼ完形		4.8	1.7	1.7	11.6	0.4	12	P-001
6	土鍒	下層	ほぼ完形		4.6	1.6	1.5	10.8	0.3	12	P-002
7	土鍒	下層	1/2形		4.6	1.5	1.5	9.0	0.3	12	P-003
8	土鍒	下層	完形		5.7	1.6	1.6	16.3	0.4	12	P-004

3号住居跡 (S I 3) (第9図、図版3)

位置 調査区北西、発掘区ではD・E-3・4区に位置する。

遺存状態 壁穴の西側と南西側が調査区外のため確認できず、南東壁の一部が現代の擾乱により削平されている。

また、遺構確認面から床面まで非常に浅いため遺存状態は良好とはいえない。

平面形 方形あるいは長方形と推測される。

規模 現存値で、北東壁2.15m、南東壁3.20mを測る。

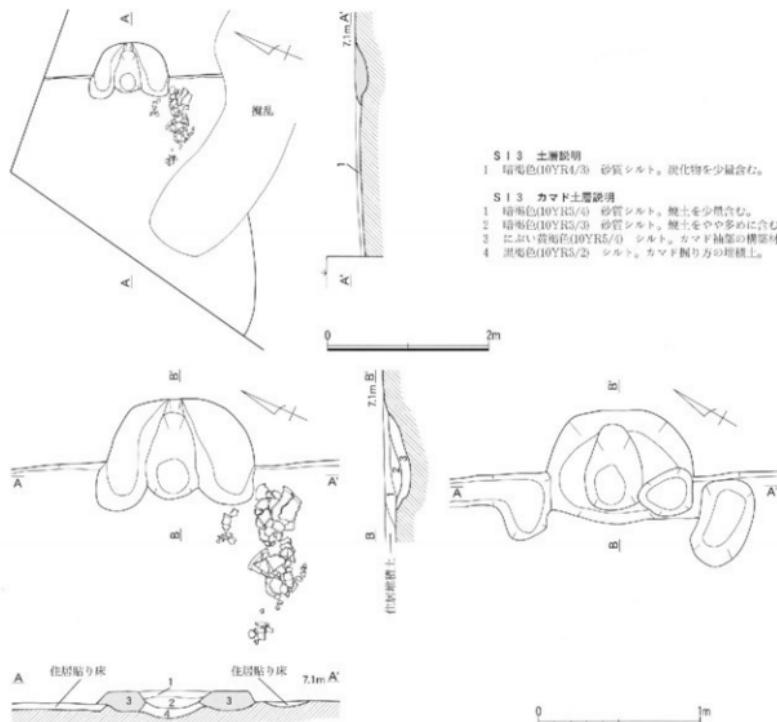
主軸方向 カマドを基点とすると、N-26°-Eである。

壁 ほぼ床面が検出された状態で遺構確認を行ったため壁は確認できなかった。

床面 基本土層Ⅲ層を床面とし、カマド付近でのみ基本土層Ⅲ層を土体とする貼り床を施し、ほぼ平坦である。

カマド 北東壁の中央から右寄りに位置すると考えられ、壁を逆U字状に掘り込んで構築している。焚口部から煙道の立ち上がりまで53cm、両袖部最大幅は96cm、焚口幅は30cmある。火床面はほぼ平坦で、奥壁寄りで緩やかに立ち上がる。

堆積土 1層を確認した。炭化物を含む基本土層IIa層を主体とする堆積土だが、堆積状態は不明である。

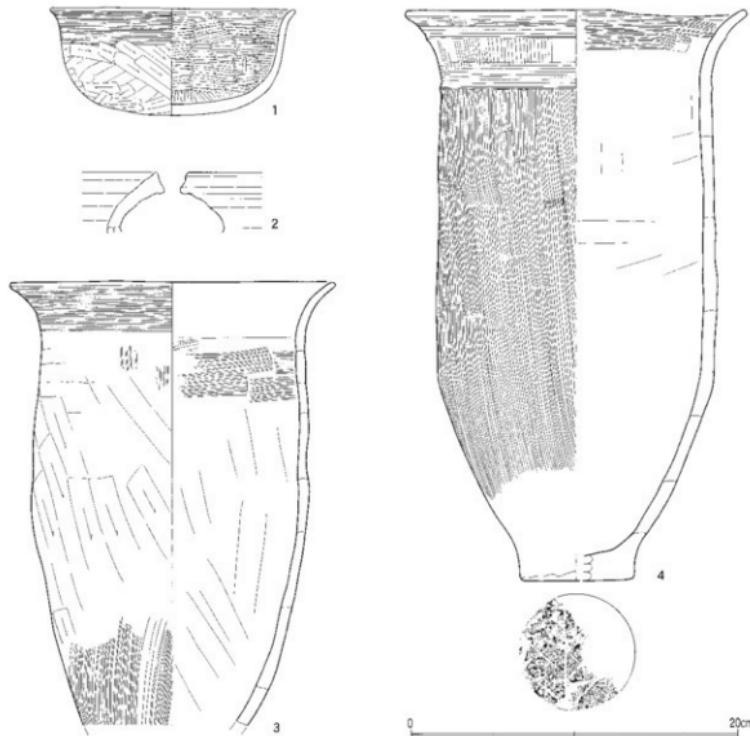


第9図 3号住居跡 (S I 3) 及びカマド

出土遺物 (第10図、第3表、図版13)

堆積土中・床面・カマド内から土師器及び須恵器が出上した。図示し得たのは、土師器鉢1点・同甕2点、須恵器甕1点である。出土したその他の土師器は壊の破片20点がある。土師器の鉢・甕ともにすべて非クロコ成形である。図示し得た1の上師器鉢は、底部が丸底状で、口縁部は端部でわずかに外反し、内面にヘラミガキ後黒色処理を施している。これは樂掛式に比定される資料と推定される。3・4の土師器甕は長胴形で、4は口縁部と胴部の境に段を有し、竪方向にハケメを施している。

時 期 上師器鉢・甕の形態からおおよそ7世紀代の前半と推定される。



第10図 3号住居跡 (S I 3) 出土遺物

第3表 3号住居跡 (S I 3) 出土遺物観察表 (第10図、図版13)

番号	種別	層位	外面	内面	残存	寸 厘 (cm)			刀山図版	登録番号
						口 縁	底 面	高 度		
1	土師鉢	カマド灰層	ヨコナメ ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色處理	口縁部～底面3/4液	15.0	—	6.5	18	C-007
2	須恵器	下脚	ロクハニア	ロクロナメ	口縁部～全体1/4弱	—	—	—	—	E-002
3	土師甕	カマド内付	ヨコナメ ヘラケズリ ケメ	ヨコナメ ハケメ	口縁部2/3 剣底3/4弱 たれ(49mm)	20.0	—	27.2	13	C-008
4	土師甕	床面	ハケメ・ヨシニア ハケメ (下部厚丸のため不明瞭)	ヨコナメ ナテ?	口縁部～底面1/2	21.0	7.0	35.0	13	C-009

4号住居跡 (S I 4) (第11図、図版4・5)

位置 調査区中央、発掘区ではI・J-4・5区に位置する。

重複関係 ピットと重複し、新旧関係は本址が古い。

遺存状態 住居跡南西側が調査区外となり、平面的に全体の $\frac{1}{2}$ 以上を検出したと推定できる。

平面形 方形を基本形とする。

規模 現存値で、北東壁4.62m、北西壁3.50mを測る。

主軸方向 カマドを基点とすると、N-39°-Wである。

壁 基本土層III層を壁とし、周溝底部から直立気味に立ち上がり、残存する壁高は12cmである。

床面 基本上層III層を床面とし、ほぼ平坦である。

カマド 北西壁に位置するが、壁外には及んでいない。焚口から煙道の立ち上がりまで45cm、両袖部最大幅は97cm、焚口幅は47cmある。火床面はほぼ平坦で奥壁へ向かって緩やかに立ち上がる。

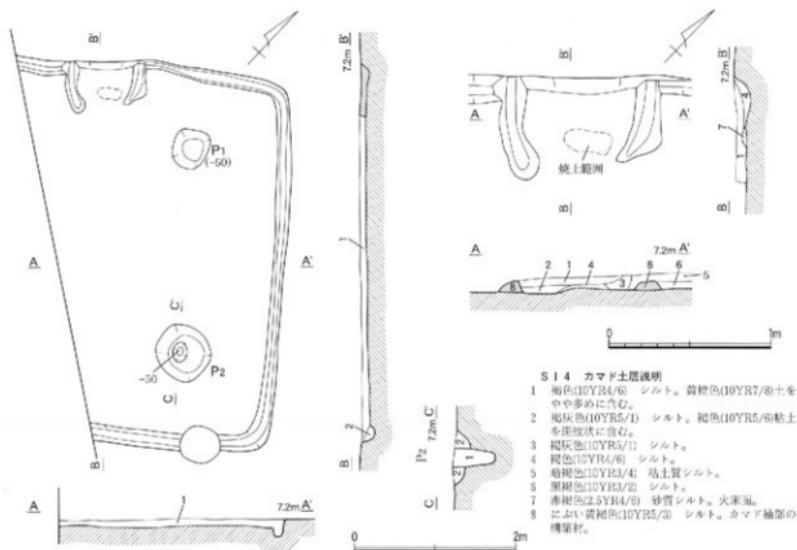
柱穴 2穴のピットを検出した。ともに主軸に対して平行に位置し、掘り方の深さも一定で、P₂に至っては柱痕跡を確認したため、柱穴と考えられる。

周溝 カマド周辺を除き全周する。規模は幅20cm前後、深さ12cmで、断面はU字状を呈する。

堆積土 2層に区分される。基本土層IIa層を主体とする堆積土であるが、堆積状態は不明である。

出土遺物 (第12図、第4表、図版12)

堆積土中・周溝内・カマド内から土師器が出土した。その中で図示し得たのは土師器環1点のみである。



S I 4 土層説明

- 1 黄褐色(10YR3/4) シルト。やや多くに含む。
- 2 黒褐色(10YR5/4) シルト。褐色(10YR5/6) 布粘土多量混入に含む。
- 3 褐灰褐色(10YR5/1) シルト。
- 4 褐色(10YR5/2) シルト。
- 5 灰褐色(10YR5/2) シルト。
- 6 黑褐色(10YR3/2) シルト。
- 7 赤褐色(2.5YR4/3) シルト。火床面。
- 8 に少い黄褐色(10YR5/3) シルト。カマド袖部の構築材。

S I 4 P2土層説明

- 1 黄褐色(10YR3/4) シルト。に少い黄褐色(10YR5/6)土を夾状に含む。
- 2 黑褐色(10YR3/2) シルト。

第11図 4号住居跡 (S I 4) 及びカマド

この他に土師器環の破片1点と同類の破片31点が出土した。図示し得た唯一の資料は、カマド内から出土し、非ロクロ成形の製品である。底部は丸底状で、口縁部と底部に明確な稜を有し、口縁部は外反して内面に黒色処理を施している。器囲式に比定される資料と推定される。また、出土した土師器環は胴部上半に縱方向のハケメと下半にヘラケズリが施された長胴形の焼である。

時期 上師器環の形態からおおよそ7世紀代に比定される。

第12図 4号住居跡 (S I 4) 出土遺物

第4表 4号住居跡 (S I 4) 山上遺物観察表 (第12図、図版12)

番号	種別	個位	外面		内面	残存	法			写真回数	登録番号
			口縁	底盤			縫隙	壁厚			
1	土師器環	カマド	メコテグ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	1/4縫隙1/3 底盤 破壊	(13.6)	—	2.5	12	C 010



5号住居跡 (S I 5) (第14図、図版4・5)

位置 調査区中央よりやや西側寄り、発掘区ではG・H-4区に位置する。

遺存状態 住居跡南側が調査区外となるが、平面的には全体の約%を検出した。

平面形 構丸方形と考えられる。

規模 北西壁5.10m、北東壁5.10mである。

主軸方向 カマドを基点とすると、N-45°-Wである。

壁 基本上層Ⅲ層を壁とし、やや聞き気味に立ち上がる。壁高は遺存状態の良好な箇所で12cmである。

床面 基本上層Ⅲ層を床面とし、ほぼ平坦である。

カマド 北西壁中央に位置し、掘り方は壁外には及ばない。煙道部先端は竪穴の壁から156cm外側にあるが、搅乱によって削平され、先端部のみが検出した。焚口から奥壁まで44cm、両袖部最大幅は96cm、焚口幅は46cmである。火床面はやや皿状を呈し、奥壁へ向かって緩やかに立ち上がる。

柱穴 柱穴は3穴検出した。P1・P3は断面で柱痕跡が確認され、いずれも竪穴の対角線上に位置することから主柱穴と考えられる。

周溝 南側が調査区外のため全容は不明であるが、北西壁の北側半分を除きほぼ全周するとと思われる。規模は幅12~16cm、深さは10cm、断面形はU字状を呈する。



堆積土 8層に区分され、全体的にレンズ状の堆積を示している。

出土遺物 (第13図、第5表、図版12)

堆積土中・床面・カマド内から土師器・須恵器・漆等が出土した。

図示し得たのは上師器環の2点である。その他に上師器環の破片4点、同類の破片35点、須恵器環の破片4点、口縁部の破片8点が出土した。

図示し得た1の土師器環は非ロクロ成形で、丸底味の底部から外気味に立ち上がり、内面にヘラミガキ後黒色処理を施している。

2の土師器環はロクロ成形で、底部は回転糸切りとなり、内面に

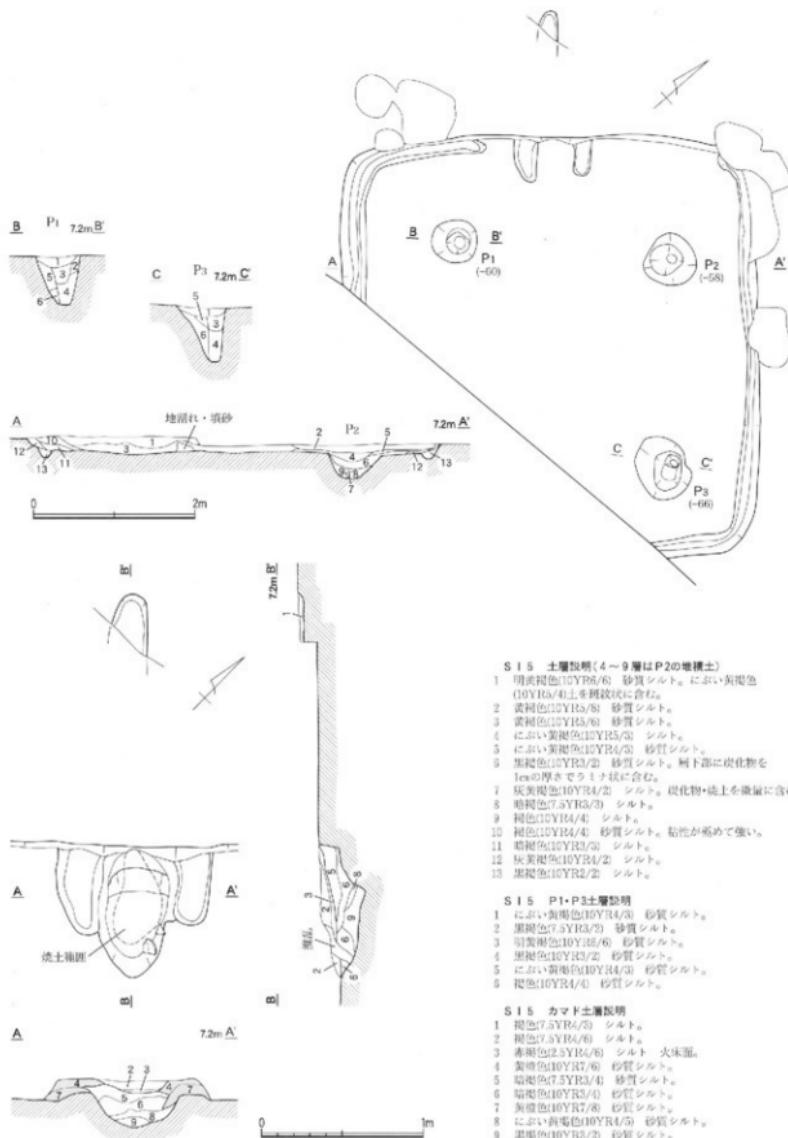


0 10cm

第13図 5号住居跡 (S I 5) 出土遺物

第5表 5号住居跡 (S I 5) 山上遺物観察表 (第14図、図版12)

番号	種別	個位	外面		内面	残存	法			写真回数	登録番号
			口縁	底盤			縫隙	壁厚			
1	土師器環	カマド	メコテグ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	1/4	(14.0)	—	5.6	12	C 011
2	七輪器環	床面	ロクロトゲ	回転糸切り	ロクロナゲ→板割(ハヘタ)	1/4縫隙1/4 底盤1/2	(35.8)	6.0	4.1	12	D 002



第14図 5号住居跡 (S 15) 及びカマド

放射状のヘラミガキと黒色処理が施された表杉ノ入式に比定される資料と推定される。また須恵器環の底部片からは回転ヘラ切りによる切り離しが確認できた。

時期 図示し得た2の上器器環及び須恵器環等の補足資料から判断すると、おおよそ9世紀前半と考えられる。

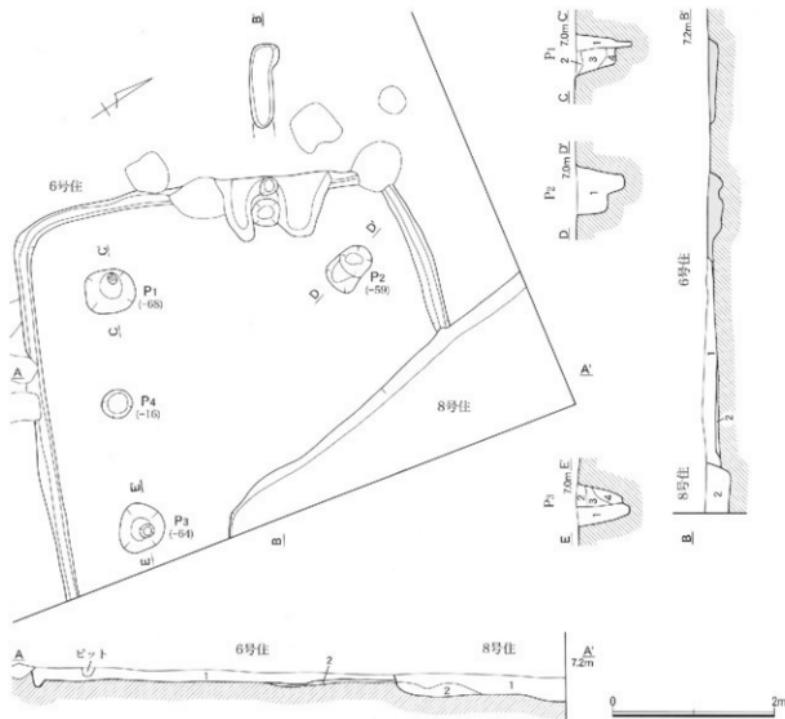
6号住居跡 (S I 16) (第15・16図、図版6)

位置 調査区北東、発掘区ではK・L・2・3区に位置する。

重複関係 北壁東半分から東壁にかけてが6号住居跡によって壊されており、また7号住居跡によって南壁の一部が壊されている。さらにピットによって西壁の一部が壊されている。

遺存状況 数箇所が他遺構によって壊されているが、平面的には住居跡全体の約1/3は遺存する。

平面形 圓丸方形と推定される。



S I 6 土層説明

- 1 黄褐色(10YR3/4) 粘土質シルト。
- 2 にい黄褐色(10YR5/4) 粘土質シルト。灰黃褐色(10YR8/2)粘土を含む。

S I 8 土層説明

- 1 黄褐色(10YR3/3) シルト。透土・礫物を少量含む。
- 2 黄褐色(10YR3/4) 砂質シルト。灰白色(10YR7/1)土を微量含む。

S I 6 P1~P3土層説明

- 1 黄褐色(10YR3/4) シルト。
- 2 黄褐色(10YR3/3) シルト。貼り床。
- 3 制褐色(10YR3/4) シルト。にい黄褐色(10YR5/4)土を網紋状に含み、灰白色(10YR7/1)粘土・微化鉄混を散在含む。
- 4 細褐色(10YR3/4) シルト。にい黄褐色(10YR5/4)土を少量含む。

第15図 6・8号住居跡 (S I 6・8)

規 模 現存値で、南壁約4.70m、西壁約4.45mを測る。

主軸方向 カマドを基点とすると、N-62°-Wである。

壁 基本土層Ⅲ層を壁とし、周溝底面からやや外傾気味に立ち上がる。壁高は良好な箇所で16cmである。

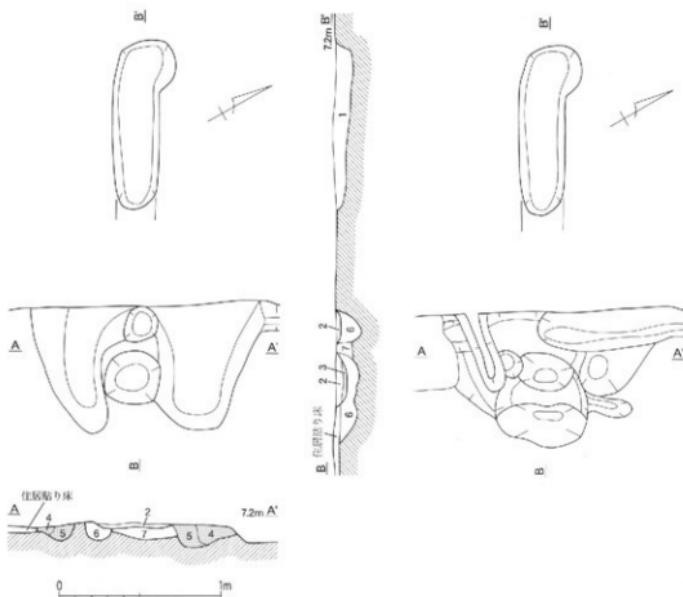
床 面 ほぼ平坦で、竪穴の中央から南側は基本土層Ⅲ層を床面とし、やや硬化している。また、中央より北側から東側にかけてはⅢ層を主体とする上で貼り床となっている。

カ マ ド 西壁中央よりやや北側に位置し、掘り方は壁外には及ばない。煙道部の先端はカマド奥壁から164cmの位置で確認され、焚口から煙道の立ち上がりまで225cm、両袖部最大幅は145cm、焚口幅は約30cmである。火床面は皿状を呈する。左袖部は基本土層Ⅲ層を芯材として掘り残し、右袖部も若干Ⅲ層を残している。両袖部とも構築材としてⅢ層に暗褐色土を混ぜた土を使用している。

柱 穴 4個のピットを検出した。P₄以外は柱痕跡があり、P₂・P₃は竪穴の対角線上に位置すると思われ、またP₄はP₁・P₃の結線際に位置するため補助用の柱穴と考えられる。

周 溝 検出した範囲内ではほぼ全周する。規模は幅12~15cm、深さは10cm内外、断面形はU字状を呈する。

堆 積 土 1層を確認した。基本土層Ⅱa層を主体とする堆積土であるが、堆積状態は不明である。



S 1 6 カマド土層説明

1 暗褐色(10YR3/7) 砂質シルト。炭化物やや多めに含む。連溝部堆積土。

2 暗褐色(10YR3/7) シルト。樹木、炭化物を中量含む。

3 にぶい黄褐色(5YR4/4) 砂質シルト。火床面。

4 にぶい黄褐色(5YR4/3) 粘土質シルト。灰黄色(10YR6/8)上を斑状に含む。

5 にぶい黄褐色(10YR5/4) 粘土質シルト。暗褐色(10YR3/3)土を少量含む。

6 暗褐色(10YR3/3) 粘土質シルト。にぶい黄褐色(10YR5/4)土を少、概土、炭化物を微量含む。

7 にぶい黄褐色(10YR5/4) 粘土質シルト。マンガン粒を少量、暗褐色(10YR3/4)土を多少含む。

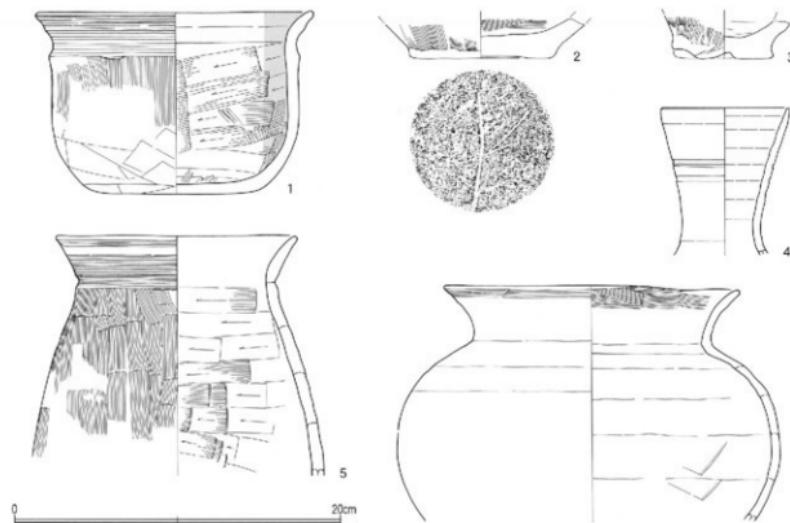
第16図 6号住居跡(S 1 6) カマド

出土遺物 (第17図、第6表、図版13)

堆積土中・床面・カマド掘り方から土師器・須恵器等が出土した。図示し得たのは土師器壺4点・同鉢1点、須恵器瓶1点の計6点である。その他に上師器壺の破片6点、同甕の破片120点、須恵器甕の破片2点が出土した。図示し得た1の土師器鉢は内面に黒色処理を施している。5の土師器甕は、胴部中央から下半に最大径を有する長胴形の形態である。6の上師器甕は銅張り形の形態である。4の須恵器瓶は口縁部端に返りを持たない。また、内面に同心円タタキメ、外面に平行タタキメを有する須恵器甕の破片も出土している。

時期 上記の出土遺物より判断すると、おおよそ7世紀後半代の所産と推定される。

特記事項 堆積土の上層から多量の糠が出土した。



第17図 6号住居跡 (S I 6) 出土遺物

第6表 6号住居跡 (S I 6) 出土遺物観察表 (第17図、図版13)

番号	種別	調査位	外 面	内 面	残 存	法 直(cm)			写真図版	登録番号
						口 径	底 径	高 度		
1	土師器	下層	ヨコナデ ハケメ? (摩耗) ヨコナデ ロコナデ→ヘラ (ため不明)	ヘラナデ→横凹	口縁部~脚部1/2弱	17.0	10.4	11.2	13	C-012
2	土師器	下層	ハケメ 木製模	ハケメ	底座完形	—	9.0	—	—	C-013
3	土師器	下層	ヘラナデ?	ヘラナデ? (摩利のため不明)	底座は摩耗有	—	(8.0)	—	—	C-014
4	須 景 瓶	下層	ヨコナデ 頂部中央に2 条の浅溝を有する	ロコナデ	口縁部~脚部は底座完形	7.8	—	—	15	E-005
5	土師器	下層	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ヘラナデ	口縁部1/4弱 脚部2/4 達	14.8	—	—	—	C-015
6	土師器	下層	ヨコナデ 刷毛以下は摩耗	ハケメ 国部以下は摩耗の ため不明	口縁53/4 底部1/2弱	16.0	—	—	13	C-016

7号住居跡 (S I 7) (第18図)

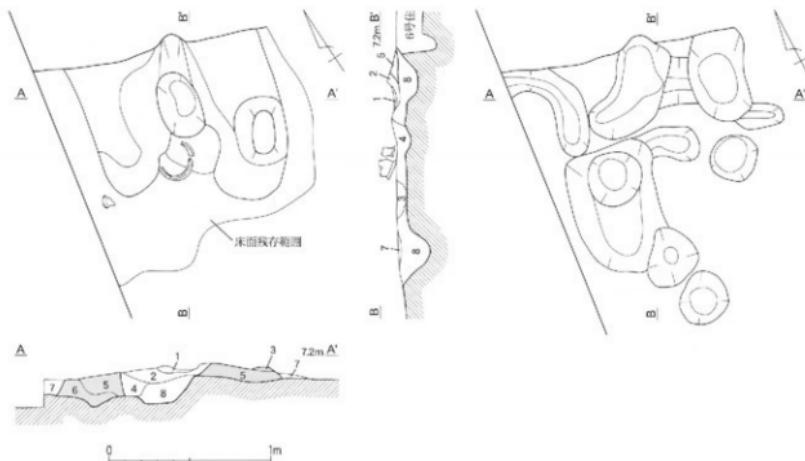
位置 調査区北東、発掘区ではK・L-3区に位置する。

重複関係 6号住居跡を切って構築されている。

遺存状態 カマド周辺のみの検出であり、遺存状態は極めて悪い。

主軸方向 カマドの形態からの推測であるが、N-17°-Eと思われる。

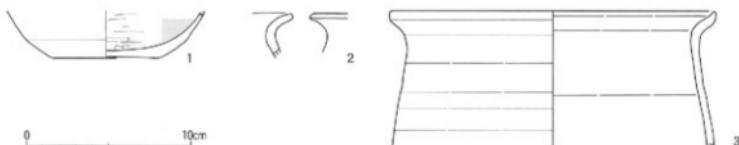
床面 基本土層Ⅲ層を主体とした暗褐色土を含む土で貼り床が施されている。



- S I 7 カマド土層説明
 1 桐色(5Y5/8) シルト。大块面。
 2 暗褐色(10YR3/4) シルト。植生をやや含む。炭化物を少量含む。
 3 天青褐色(10YR5/2) シルト質。
 4 暗褐色(10YR3/2) シルト。酸化鉄斑を含む。
 5 暗褐色(10YR3/3) 砂土質シルト。に多い黄褐色(10YR5/0)土を斑状に含む。

- 6 に多い黄褐色(10YR5/0) 砂質シルト。暗褐色(10YR4/3)土を少額。酸化鉄斑を含む。
 7 暗褐色(10YR3/0) シルト。刷り土。
 8 暗褐色(10YR3/0) 砂質シルト。カマド掘り方の堆積土。

第18図 7号住居跡 (S I 7) カマド



第19図 7号住居跡 (S I 7) 出土遺物

第7表 7号住居跡 (S I 7) 出土遺物観察表 (第19図、図版13)

番号	種別	層位	外 面	内 面	瓶 石	法 線(cm)			写真図版	登録番号
						II 領	III 領	器 高		
1	土 陶 瓦	カマド	ロクロナデ 国際へラ切り 一括伝へケズリ	ロクロナデ ヘラミガキ 墨色斑	全体～底部1/2弱	-	(0.4)	-	-	D-003
2	土 陶 瓦	カマド	ロクロナデ (摩耗のため不明)	ロクロナデ (摩耗のため不明) IO	口縁部小片	-	-	-	-	C-017
3	土 陶 瓦	カマド	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/2弱	19.8	-	-	13	D-004

カマド 壁を若干掘り込んで構築されている。焚口から煙道の立ち上がりまで85cm、両袖部最大幅は約120cm、焚口幅は35cmである。火床面は皿状を呈し、奥壁に向かって緩やかに立ち上がる。

出土遺物 (第19図、第7表、図版13)

カマド内から上師器片が出土した。図示し得たのは土師器壺1点・同甕2点である。その他は土師器壺の破片5点・同甕の破片4点が出土地で出土している。図示し得た1の土師器壺はロクロ成形で、回転ヘラ切り後外周を回転ヘラケズリ調整しており、内面はヘラミガキ後黒色処理を施している。表杉ノ入式に比定できる資料である。土師器甕は、2が非ロクロ成形、3がロクロ成形である。

時期 上記の出土遺物より判断すると、およそ9世紀前半の所産と考えられる。

8号住居跡 (S I 8) (第15図、図版6)

位置 調査区北東、発掘区ではL-2区に位置する。

重複関係 6号住居跡の東側を切って構築されている。

遺存状態 北側と東側が調査区外となり、全容は把握しきれていない。

平面形 圓角方形と推定される。

規模 西壁で現存長4.65mを測る。

主軸方向 現状では不明である。

壁 6号住居跡の堆積土を一部壁面とし、床面からやや外傾気味に立ち上がる。壁高は29cmである。

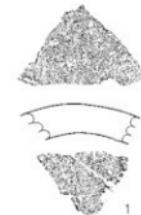
床面 基本土層のⅢ層を床面としているが、やや凸凹が見られる。

堆積土 2層を確認した。基本土層Ⅱa層を主体とする堆積土であるが、堆積状態は不明である。

出土遺物 (第20図、第8表、図版13)

堆積土中から上師器・須恵器・丸瓦等の小片が出土地で出土したが、図示し得たのは丸瓦1点のみである。その他は土師器壺の破片5点・同甕の破片30点、須恵器壺の破片1点である。丸瓦片は凹面に布目模を有し、凸面はナデ調整される。また土師器壺の破片はいずれもロクロ成形で、内面に黒色処理を施している。表杉ノ入式に比定できる資料と考えられる。

時期 詳細は不明であるが、上記出土遺物より判断すると、およそ9世紀代の所産と思われる。



第20図 8号住居跡 (S I 8) 出土遺物

第8表 8号住居跡 (S I 8) 出土遺物観察表 (第20図、図版13)

番号	種別	裏位	時代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	孔 径 (cm)	刃ひび数	登録番号
1	丸瓦	下層	右勾-執事屋方向へのヘタゲ	凹面-布目模	-	-	1.5	-	13	F-001

9号住居跡（S I 9）（第21図、図版7）

位 置 調査区中央よりやや東寄りに位置し、発掘区ではK～M-5・6区に位置する。

遺存状態 壁穴の北東隅が調査区外となるが、ほぼ全体を検出した。なお、西側床面の一部が削平されている。

平面形 方形を基本形とする。

規模 西壁で5.73m、南壁で5.75m、床面積は現存値で約23.3m²である。

主軸方向 カマドを基点とすると、N-67°-Eである。

壁 基本上層Ⅲ層を壁としており、周溝底部からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は良好な箇所で16cmである。

床 面 カマド付近を除きほぼ全面に貼り床を確認した。基本上層Ⅲ層を主体とした土で貼り床が施されている。

カマド 東壁の中央に位置し、両袖部の掘り方が若干壁外に及んでいる。焚口から煙道の立ち上がりまで95cm、両袖最大幅は107cm、焚口幅は30cmである。両袖部とも芯材として土師器壺を逆位に設置し、その上に砂岩を棒状に加工した石材を架橋し、焚口天井部の芯材としている。その状態をカマド断面図に見通し図で示した。また、カマド燃焼部中央に礫岩と土師器壺が接した状態で検出され、文脚かと考えたが火床面から若干浮いていたことと、礫岩に被熱痕が観察されないことから、天井部の崩落時に混入した遺物と推定した。

柱 穴 ピットは大小7穴検出された。その内P₁～P₄は壁穴の対角線上に位置し、柱痕跡が確認されたため、主柱穴と考えられる。

周 溝 カマド部分を除き、東壁から南壁にかけ確認した。規模は幅13～20cm、深さ20cm内外である。断面形はU字型を呈する。

床下土坑 略円形を呈し、規模は長軸86cm、短軸79cmである。堆積土は周溝堆積土と近似する。

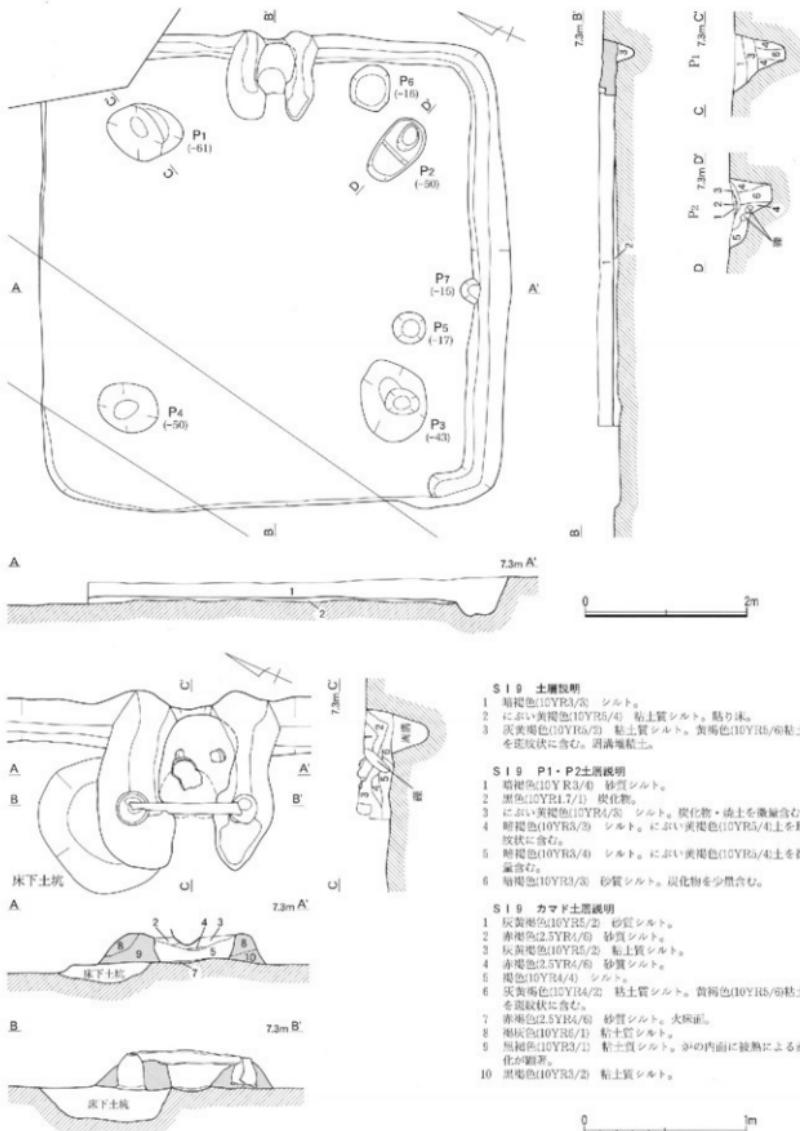
堆 積 土 3層を確認した。基本土層Ⅱa層を主体とする堆積土であるが、堆積状態は不明である。

出土遺物（第22～24図、第9表、図版14・15）

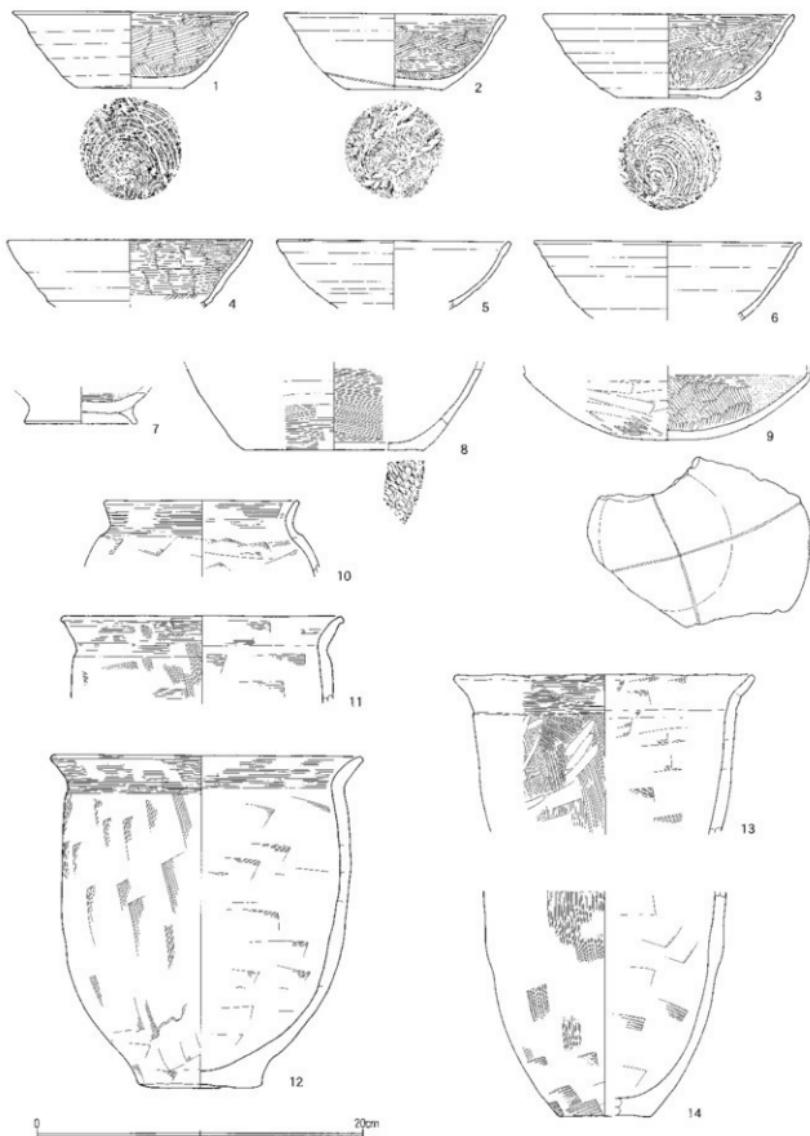
堆積土中・カマド内・ピットから土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器・綠釉陶器・鉄製品・土製品が出上した。図示し得たのは上師器壺5点・同高台付壺1点・同壺12点・須恵器壺2点・同長頸瓶1点・同壺1点・同鉢1点・赤焼土器壺2点・同壺1点・綠釉陶器1点・土鍾17点である。その他に土師器壺の破片73点・同壺の破片599点・同高環の破片1点・須恵器壺の破片8点・同壺の破片2点・鉄片2点がある。図示し得た土師器壺は9を除きすべてロクロ成形で、内面はヘラミガキ後黒色処理をしている。土師器壺は非ロクロ成形とロクロ成形のものがあり、表杉ノ人式に比定される資料である。21の須恵器壺は回転糸切り未調整の製品である。同長頸瓶は口縁部外面に稜を持つ。赤焼土器は环が2点、瓶の把手部分と思われる破片1点が出上している。綠釉陶器は底部小片のみで、器形はおそらく皿である。土製品は土鍾がカマド付近の下層から17点出土した。

時 期 土師器壺の形態と口径比・須恵器壺の底部切り離し・須恵器長頸瓶の形態等から判断すると、およそ9世紀後半代の所産と推定される。

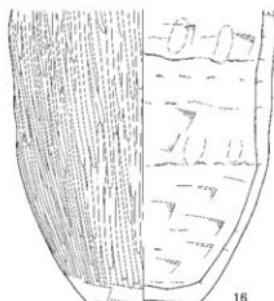
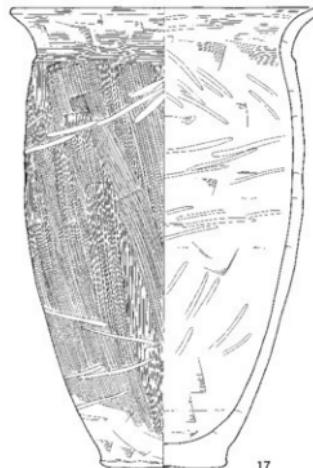
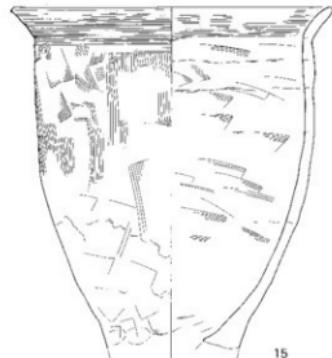
特記事項 住居跡南西隅に編み物石、もしくはカマド壁の芯材と考えられる長楕円形の石が多数出土した。



第21図 9号住居跡(S.I.9)及びカマド・床下土坑

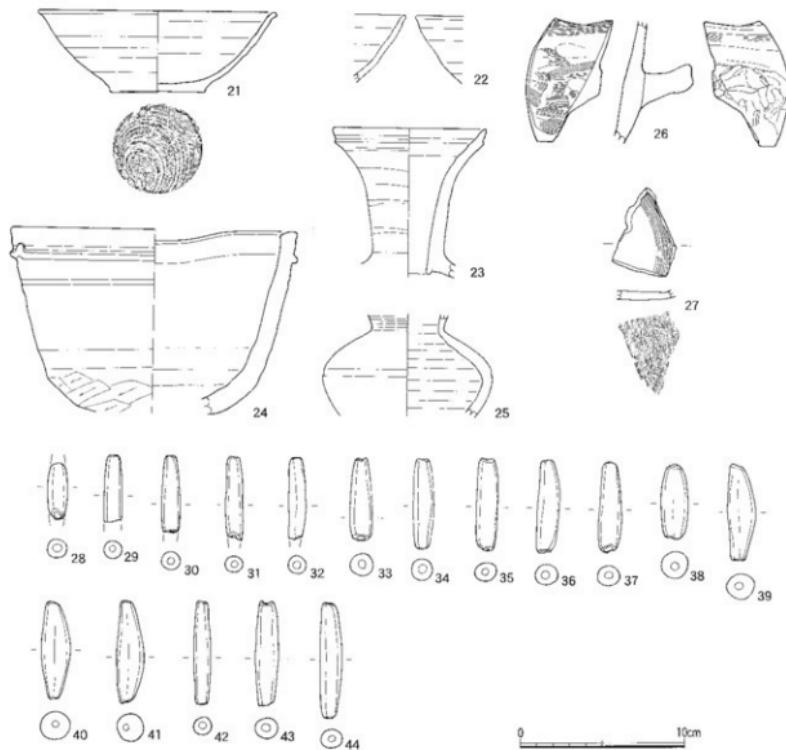


第22図 9号住居跡（S I 9）出土遺物（1）



0 20cm

第23図 9号住居跡(S19)出土遺物(2)



第24図 9号住居跡（S 1・9）出土遺物（3）

第9表 9号住居跡(S-I 9)出土遺物観察表(第22~24回、図版14・15)

番号	種別	属位	外 面	内 容	残存	法量(cm)			寸高	直通幅	直通高
						口 領	底 領	高			
1	上 鋼 磁	ビット5	ロクロナデ 口縫糸切り ハラタケグリ 底部に 黒墨斑入り	ロクロナデ⇒放射状ヘラミ ガモ→黑色处理	体部3/4 断面透存	14.4	6.6	4.7	14	D-005	
2	下 鋼 磁	ビット5	ロクロナデ 口縫糸切り→ ガモ(厚底のため引張強)	ロクロナデ⇒放射状ヘラミ ガモ→黑色处理	体部3/4 底部遺存	13.6	6.0 (5.6~ 6.0)	4.2	14	D-006	
3	土 鋼 磁	床面	ロクロナデ 口縫糸切り	ロクロナデ⇒放射状ヘラミ ガモ→黑色处理	体部1/4 底部遺存	(12.1)	6.0 (5.6~ 6.2)	5.1	14	D-007	
4	上 鋼 磁	上部	ロクロナデ	ロクロナデ	口縫→体部1/2前	15.0			—	D-008	
5	始末器 棒	上端	ロクロナデ	ロクロナデ	体部1/4	(11.4)			—	D-009	
6	板張上 鋤	ビット5	ロクロナデ	ロクロナデ	口縫→体部1/4前	16.4			—	D-010	
7	土 鋼 磁	上端	ロクロナデ	ロクロナデ⇒ヘラミガモ 黑色处理	体部若干 高台附 透存	—	高台附	6.8	—	14	D-011
8	山 鋼 磁	上部	ハケメ 黒帯に青斑状の 斑入り	ハケメ	網部⇒底部破片	(11.0)			—	C-018	
9	二 鋼 磁	上端	ハケメ 黒帯に黒帯状の 斑入り	ハケメ⇒ハラミガモ 黑色处理	一定方向のヘラミガモ⇒黑 色處理	底部1/3			—	C-019	
10	上 鋼 磁	上部	ヨコナデ ハケメ	ハラナデ ハラナデ	口縫延⇒脚取上位1/4 四	(11.6)			—	C-020	
11	二 鋼 磁	カソク方 向	ヨコナデ ハマメ→ハラナ デ	ヨコナデ ハラナナ	口縫部⇒脚取上位1/4	(17.0)			—	C-021	
12	二 鋼 磁	カソク方 向	コヨナデ ハケメ 大葉柄	ヨコナデ ハラナデ	口縫延⇒脚取⇒底 部透存	18.8	7.6	20.4	14	C-022	
13	上 鋼 磁	根端上	ヨコナデ ハマメ→ハラ ナデ	ヨコナデ⇒ヨコナデ⇒ハ ラナデ	口縫延⇒脚取上位1/3	(17.0)			—	C-023	
14	十 鋼 磁	カソド	ハケメ ハマメ 木裏模	ハラナデ⇒部分的にハケメ ハラナデ	脚取下位1/4 脚取2/ 3	—	(3.6)	—	—	C-024	
15	上 鋼 磁	カソド	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハラナデ	口縫部⇒脚取は遺存 脚取下位1/3 脚取2/ 3	18.4			—	C-025	
16	土 鋼 磁	カソド	ハケメ ハマメ ハラナ デ	ハラナデ⇒部分的に指ナ デ	脚取下位1/3 脚取2/ 3	—	6.8	—	—	C-026	
17	七 鋼 磁	カソドん 粘土層	ヨコナデ⇒ハラミ ハ ラナデ⇒部分的にヘラミ ガモ	ヨコナデ⇒部分的にヘラミ ガモ	口縫部1/2	(18.6)	7.8	28.2	14	C-027	
18	土 鋼 磁	ミット5	ロクロナデ	ロクロナデ⇒ヨコヘラナ デ	口縫部⇒脚取上位1/3	(22.0)			—	D-012	
19	土 鋼 磁	堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	口縫部1/6 新断上位 1/2前	(22.0)			—	D-013	
20	土 鋼 磁	下部	ロクロナデ	ロクロナデ カキメ	口縫部1/4 脚取若干	(22.0)			—	D-014	
21	土 鋼 磁	床面	ロクロナデ 口縫糸切り 全体一端部にかけて黒斑あり	ロクロナデ	体部2/3 断面透存	14.5	5.7	5.1	15	E-004	
22	油 油 器	上部	ロクロナデ	ロクロナデ	口縫部小片	—			—	E-005	
23	油 油 器	床面	ロクロナデ ハラナ	ロクロナデ	口縫部1/4時 通路延 長透存	(9.2)			—	E-006	
24	油 油 器	下部	ロクロナデ 手持ちハラ ナズリ 口縫部延長に3ヶ所 みみ入り	ロクロナデ	口縫部3/4時 通路延 長1/3	17.4 (17.1 ~19.3)			—	E-007	
25	油 油 器	床面	ロクロナデ⇒吹抜中 央まで凹凸無れ	ロクロナデ	吹抜部1/2前	19.4	11.0	—	15	E-008	
26	油 油 器	カツマト 下部	ロクロナデ	ロクロナデ⇒ハラナデ	小片	—			—	D-015	
27	残塊陶	上部	ロクロナデ 緑縞	ロクロナデ 緑縞	底部1/4以下	—			—	I-001	
番号	種別	属位	付 形	高さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	立 量 (g)	飛 行 (cm)	直通 幅	直通 高	直通 長
28	土 鋼	下部	一型欠損	3.6	1.2	1.1	5.9	0.5	15	P-005	
29	土 鋼	下部	一型欠損	4.1	1.1	1.1	8.5	0.4	15	P-006	
30	土 鋼	下部	はく痕	4.7	1.1	1.1	9.2	0.4	15	P-007	
31	土 鋼	下部	一型欠損	5.2	1.1	1.1	8.8	0.4	15	P-008	
32	土 鋼	下部	はく穴	5.1	1.1	1.1	8.9	0.5	15	P-009	
33	土 鋼	下部	完形	5.1	1.4	1.3	11.8	0.4	15	P-010	
34	土 鋼	下部	完形	5.6	1.3	1.3	13.2	0.4	15	P-011	
35	土 鋼	下部	完形	5.7	1.4	1.3	13.2	0.4	15	P-012	
36	土 鋼	下部	完形	5.7	1.4	1.3	13.4	0.4	15	P-013	
37	土 鋼	下部	完形	5.6	1.4	1.2	13.0	0.4	15	P-014	
38	土 鋼	下部	完形	4.6	1.7	1.7	16.6	0.5	15	P-015	
39	土 鋼	下部	完形	5.9	1.7	1.7	17.8	0.5	15	P-016	
40	土 鋼	下部	完形	6.0	1.8	1.8	20.2	0.4	15	P-017	
41	土 鋼	下部	完形	6.3	1.6	1.5	19.4	0.3	15	P-018	
42	土 鋼	下部	完形	6.4	1.1	1.1	10.2	0.4	15	P-019	
43	土 鋼	下部	完形	6.4	1.4	1.5	14.8	0.5	15	P-020	
44	土 鋼	下部	完形	7.2	1.4	1.1	14.4	0.4	15	P-021	

10号住居跡（S I 10）（第25図）

位置 調査区中央から東側へ、発掘区ではN-6区に位置する。

重複関係 1号孤立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

遺存状態 造構の大半が調査区外に位置するため詳細は不明である。

壁 基本土層II b層及びIII層を壁とし、やや外側に開きながら立ち上がる。壁高は最大で35cmである。

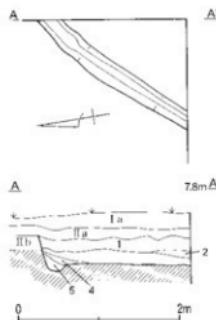
床面 ほぼ平坦で基本土層III層を床面とし、竪穴中央付近がやや硬化している。

周溝 検査範囲内では全周する。規模は幅15~20cm、深さは10cm、断面形はU字型を呈する。

堆積土 5層に分層され、基本土層II a層を主体とする堆積土で、竪穴の中央に向かいレンズ状の堆積を示す。

出土遺物 堆積土中から出土した土師器甕の胸部片1点が唯一の資料である。非クロロ成形で、器形は長胴形、外面に縦方向のハケメ、下位にヘラケズリ、内面には横方向のハケメが施してある。

時期 詳細は不明である。



S I 10 土層説明
1 ない青褐色(10YR4/3) シルト。
2 黒褐色(10YR17/1) シルト。
3 黑褐色(10YR15/2) 砂質シルト。
4 黑褐色(10YR2/2) 砂質シルト。
5 灰黄褐色(10YR5/2) 砂質シルト。

第25図 10号住居跡（S I 10）

11号住居跡（S I 11）（第26図、図版8）

位置 調査区中央より南に位置し、発掘区ではJ・K-8・9区に位置する。

重複関係 12号住居跡によって南東壁の一部が切られている。

遺存状態 南東壁の一部を12号住居跡に切られてはいるが、遺存状態はおおむね良好である。

平面形 四角形を呈する。

規模 南西壁で3.28m、南東壁で3.10mである。床面積は約6.2m²である。

主軸方向 カマドを基点として、N-36°-Wを測る。

壁 基本土層III層を壁とし、周溝底部からやや開き気味に立ち上がる。壁高は12cmである。

床面 ほぼ平坦で基本土層III層を床面とし、竪穴の中央がやや硬化している。

カマド 北西壁のほぼ中央に位置し、壁外に35cmほどU字型に掘り込んで構築されている。焚口から煙道の立ち上がりまで66cm、両袖部最大幅は130cm、焚口幅は約60cmである。火床面は皿状を呈する。袖部は基本土層III層を主体とした暗褐色土を含む土を構築材としている。

貯蔵穴 竪穴の北隅で検出されたP₅を貯蔵穴と判断した。規模は長径50cm、短径28cm、深さ11cmを測る。

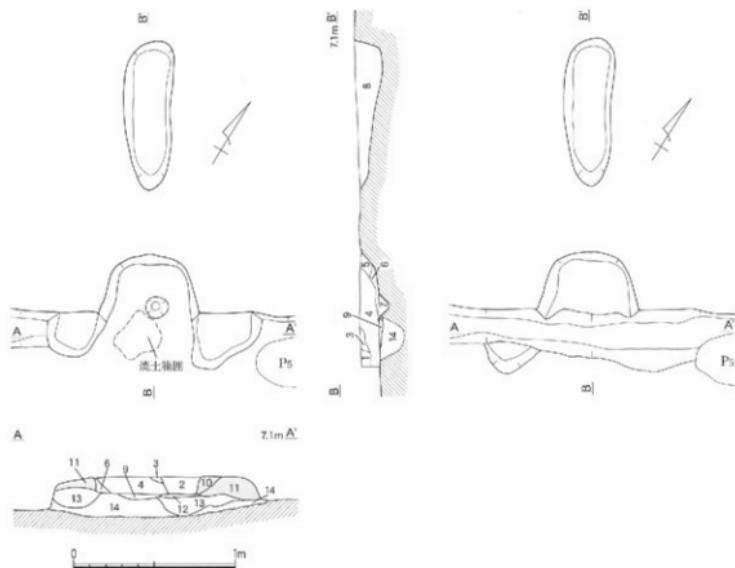
柱穴 ピットは4穴検出され、P₁には柱痕跡が確認されたが、いずれのピットも浅く、配置関係も規則性に欠け、主柱穴とは判断し難い。

周溝 カマドの北西側から南西壁、南東壁まで確認され、幅12~15cm、深さ10~12cmを測り、断面形はU字形を呈する。

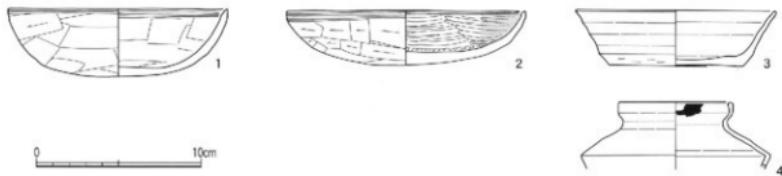
堆積土 1層を確認した。基本土層II a層を主体とする堆積土であるが、堆積状態は不明である。

出土遺物 (第27図、第10表、図版16)

堆積土中・床面から土師器・須恵器が出土した。図示し得たのは土師器壺2点・須恵器壺1点・同短頸壺1点である。その他は土師器甕の破片24点・須恵器甕の破片3点である。図示し得た1・2の上師器壺は非クロロ成形で、底部は丸底状を呈し、口縁部は内湾しながら立ち上がる。1の内面には黒色処理



第26図 11号住居跡（S 111）及びカマド



第27図 11号住居跡 (S I 11) 出土遺物

第10表 11号住居跡 (S I 11) 出土遺物観察表 (第27図、図版16)

番号	種類	部位	外面	内面	残存	法寸量(cm)			写真図版	登録番号
						口径	底深	容積		
1	土師器 杯	床面	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ナダ	1/2強	(15.4)	—	4.2	15	C-028
2	土師器 杯	上部	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラミガキ→黒色處理	完形	14.5	—	3.3	15	C-029
3	須恵器 杯	下部	ロクヨナデ 回転ヘラ切り →青銅鋳造ヘラケズリ	ロクロナデ	1/2	(12.0)	8.2	3.5	15	E-009
4	須恵器 短頸瓶	下部	ヨコナデ 口縁部と肩部 に自然輪	ヨコナデ 口縁部に通が 付着	1/3強部→底部1/4	(7.0)	—	—	15	E-010

は施されていないが、2はヘラミガキ後黒色処理されている。国分寺下層式に比定される資料である。

3の須恵器杯は、底部を回転ヘラ切り後外周にヘラケズリ調整が施されている。4の短頸瓶は口縁部内面に漆が付着している。

時期 上記出土遺物の形態的特徴より判断すると、おおよそ8世紀中頃の前半と推定される。

12号住居跡 (S I 12) (第28図、図版8)

位置 調査区中央から南側に位置し、発掘区ではK・L-8・9区に位置する。

重複関係 竪穴の北西隅で11号住居跡を、北東側では13号住居跡を切り、また南側半分は1号堀跡に切られている。

遺存状態 1号堀跡によって半分以上が壊され、確認時には堆積土の大半がなかったため、遺存状態は良好ではない。

平面形 方形と推測される。

規模 現存値で西壁1.95m、北壁4.00mである。

主軸方向 カマドを基点とすると、N-10°-Eである。

壁 基本土層Ⅲ層を壁とし、床面からやや開き気味に立ち上がっている。壁高は良好な箇所で24cmを測る。

床面 基本土層Ⅲ層を床面とし、ほぼ平坦である。竪穴の中央でやや硬化している。

カマド 北壁中央よりやや東側に位置し、掘り方は壁外には及ばない。煙道部はカマド奥壁から外側へ154cmに位置し、幅は20cm、先端部では26cm、現存長100cmを測る。煙道部先端に向かい緩やかに傾斜し、先端部の形態がややピット状となる。焚口部から煙道の立ち上がりまで75cm、両袖部最大幅165cm、焚口幅は60cmである。火床面はやや皿状を呈する。袖部は基本土層Ⅲ層を主体とする土層を構築材としている。また、袖部内からは土師器壺の破片がまとめて出土している。

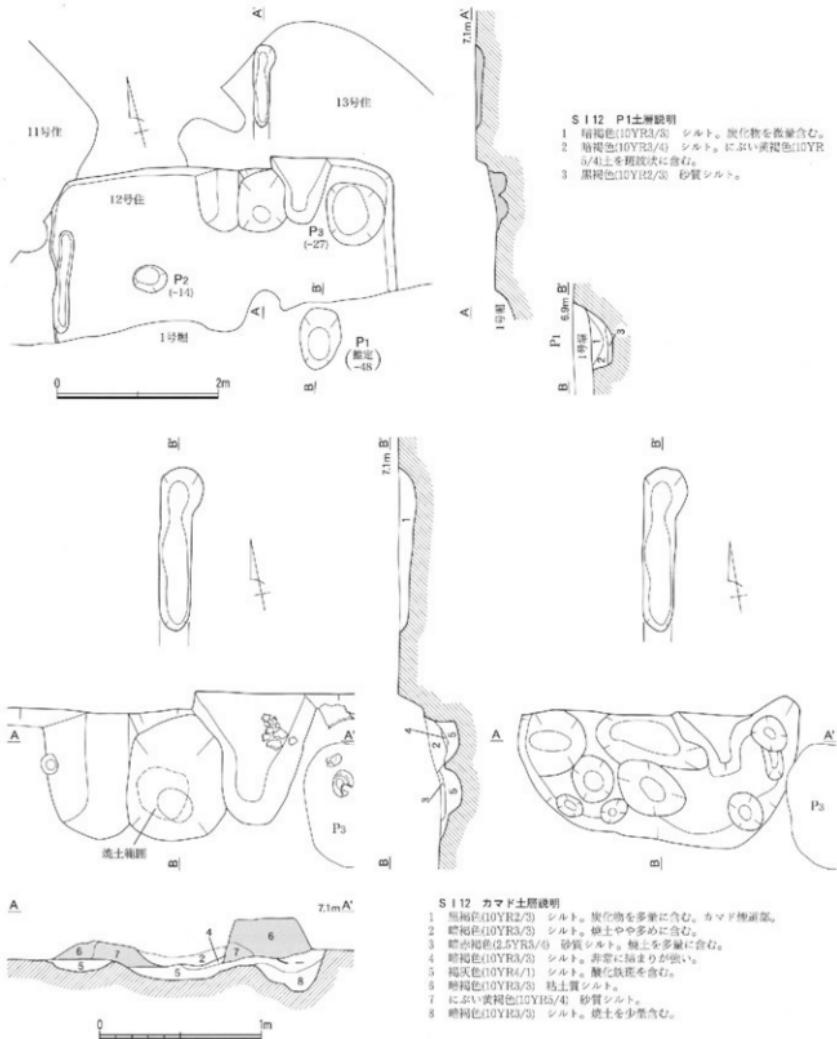
貯藏穴 竪穴の北東隅で検出されたP₃を貯蔵穴と判断した。規模は長径80cm、深さ27cmを測る。

柱穴 ピットは2穴検出されたが、配置は不明瞭である。

堆積土 後世の搅乱によって床面付近まで大きく削平され、堆積土の大半が存在しない状態であった。

出土遺物 (第29図、第11表、図版16)

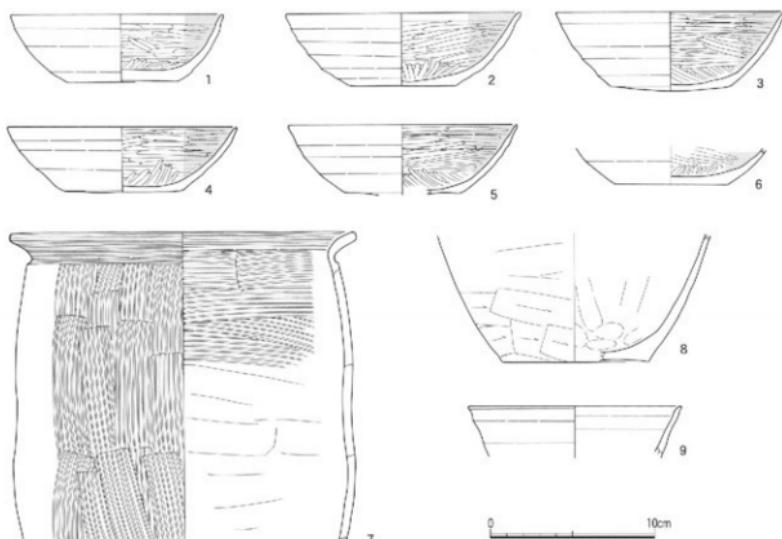
堆積土中・床面・カマド内から土師器・須恵器等が出土した。図示し得たのは土師器壺6点・同甕2点、須恵器杯1点である。その他に土師器杯の破片20点・同甕の破片32点、須恵器壺の破片1点・同甕の破



第28図 12号住居跡 (S II 12) 及びカマド

片1点が出土した。図示し得た1～6の土師器はロクロ成形で、内湾気味に立ち上がり、底部は切り離し後に再調整されたものが多い。内面はヘラミガキ後黒色処理が施され、表衫ノ入式に比定される資料である。7の土師器は非ロクロ成形の長胴甕で、口縁部と胴部の境に段を持ち、胴部に縱方向のハケメを有する。また、胴部下半の内面には煮炊きに関連すると思われる繊維状の付着物が認められる。

時 期 土師器の形態的特徴及び口径比から判断すると、およそ9世紀前半の所産と推定される。



第29図 12号住居跡（S I 12）出土遺物

第11表 12号住居跡（S I 12）出土遺物観察表（第29図、図版16）

番号	種類	断面	外 面	内 面	残存	寸 法 (cm)			写真開版	資料番号
						口 径	底 径	厚 度		
1	土師器	横断面	ロクロナデ 回転丸切り→一部手造ちへタケズリ	ロクロナデ ロクロナデ→ヘラミガキ	3/4	12.9	6.5	4.2	16	D-015
2	土師器	横断面	ロクロナデ 回転丸切り	ロクロナデ ロクロナデ→ヘラミガキ	0/4	14.4	6.6	4.6	16	D-017
3	土師器	横断面	ロクロナデ 回転ハラケズリ	ロクロナデ ロクロナデ→ヘラミガキ	1/9断	(14.0)	7.2	4.9	16	D-018
4	土師器	下部	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ ロクロナデ→ヘラミガキ	1/2断	14.9	7.2	4.1	16	D-019
5	土師器	下部	ロクロナデ 回転丸切り→ヘラミガキ	ロクロナデ	1/3	(14.0)	(7.0)	4.3	—	D-020
6	土師器	下部	ロクロナデ 肩部は厚桂(ためぶくろ)	ロクロナデ ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	体部→底部3/4	—	6.8	—	—	D-021
7	土師器	カマド	ロクロナデ ハケメ	ロクロナデ ハケメ(肩部下部は打音器のため不明)	口盤部→肩部上半1/2	(31.0~32.0)	—	—	16	C-600
8	土師器	カマド	ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラナデ 相應内壁	胴部下半→底5/3	—	(9.0)	—	—	C-601
9	漆器	下部	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁溝1/4	(13.0)	—	—	—	E-011

13号住居跡 (S I 13) (第31図、図版8)

位 置 調査区中央から南側に位置し、発掘区ではK・L・8・9区に位置する。

重複関係 南西側が12号住居跡、南側が1号掘跡によって壊されている。

遺存状態 12号住居跡、1号掘跡によって竪穴の半分近くが壊され、遺存状況は良好ではない。

平面形 前述した重複のため明確ではないが、隅丸方形と考えられる。

規模 現存値で北東壁4.70m、北西壁2.50mを測る。

主軸方向 カマドを基点とすると、N=30°Wである。

壁 基本土層Ⅲ層を壁とし、やや開き気味に立ち上がる。壁高は遺存状態が良好な箇所で14cmである。

床 面 基本土層Ⅲ層を床面としており、ほぼ平坦である。竪穴の中央がやや硬化している。一部に貼り床が施されている。

カ マ ド 北西壁に位置し、掘り方は壁外まで及ばない。煙道部はカマド奥壁から外側160cmに位置し、現存長は103cm、煙道部の幅は26cm、先端部では34cmを測る。煙道部は途中で段を持ちながら先端部に向かって緩やかに傾斜し、先端部の形態はピット状を呈する。焚口部から奥壁まで70cm、焚口幅は90cmである。火床面は皿状を呈し、袖部は住居構築時に基本土層Ⅲ層を振り残して袖部の芯材としている。

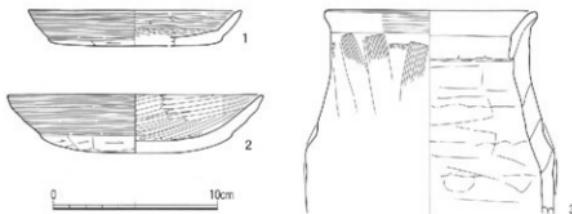
柱 穴 ピットは5穴検出した。いずれも柱痕跡は確認されなかったが、位置的にP₁・P₃が主柱穴の可能性が高い。

堆 積 土 2層に分層され、基本土層Ⅱa層を主体とする堆積土で、おおよそレンズ状の堆積を示す。

出土遺物 (第30図、第12表、図版16)

堆積土中・床面から土師器・須恵器が出土した。図示し得たのは土師器壺2点・同甕1点である。その他に土師器環の破片が2点・同甕の破片が3点、須恵器甕の破片が2点出土した。図示し得た土師器壺は1・2とも非クロ成形で、口縁部は外傾しながら立ち上がり、丸底状と平底状の2種類がある。内面はヘラミガキ後黒色処理を施してあるが、2の黒色処理は淡い。おおよそ国分寺下層式に含まれる資料と考えられる。上師器甕は非クロ成形で最大径が胴部中央から下半にある長胴形と思われ、また内面の調整は粗く、輪積み痕が顕著である。

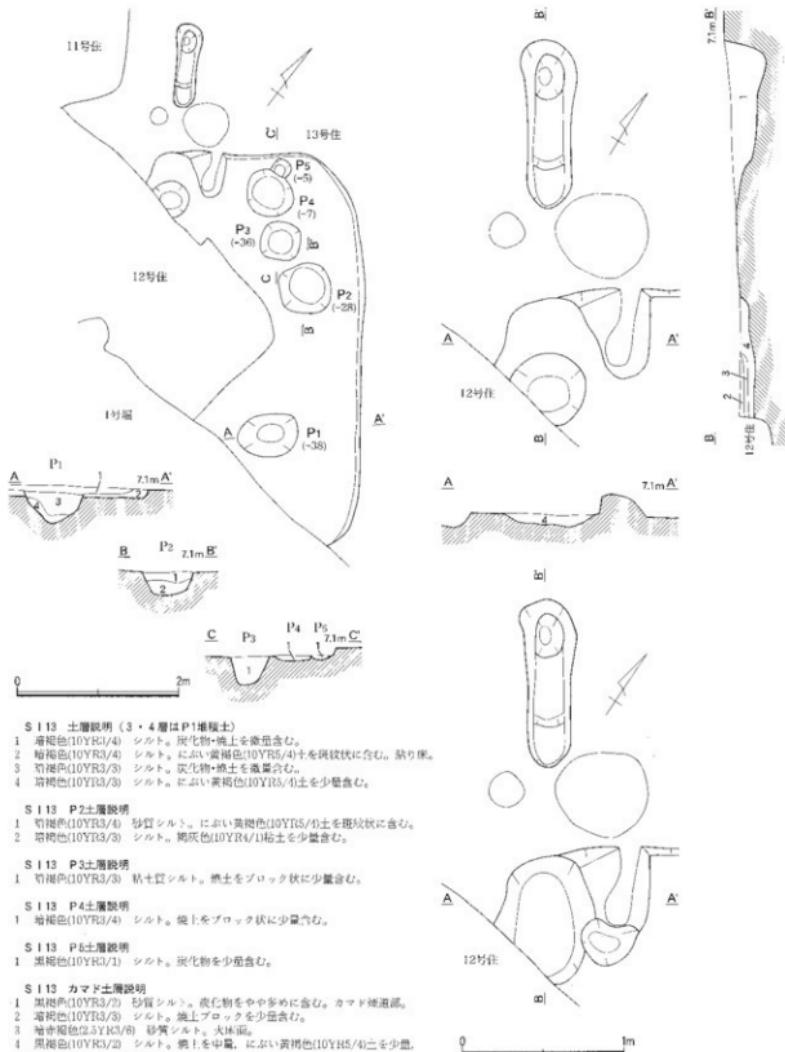
時 期 詳細は不明であるが上師器壺の形態的特徴より判断すると、おおよそ8世紀前半代の所産と推定される。



第30図 13号住居跡 (S I 13) 出土遺物

第12表 13号住居跡 (S I 13) 出土遺物観察表 (第31図、図版16)

番号	種 類	形 位	外 面	内 面	残 存	寸 法(cm)			写真図版	登録番号
						D	径	深 底		
1	土 師 壺	床面	ヨコナメ ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	1/3	13.0	—	2.2	15	C-032
2	土 師 壺	床面	ヨコナメ ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	1/1	(15.5)	—	3.6	15	C-033
3	土 師 壺	床面	ヨコナメ ヘラメ (下位は 厚粘土のため不明)	口縁部は摩耗のため不明 ヘラナメ	1/2	(13.0)	—	—	15	C-034



第31回 13号住居体（S-L13）及砾カマド

第2節 挖立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (S B 1) (第32図)

位置 調査区中央から東に位置し、発掘区ではN 5・6区に位置する。

遺存状態 大半が調査区外に位置するため良好ではない。

平面形 現状では桁行・梁行とも1間のみの確認である。

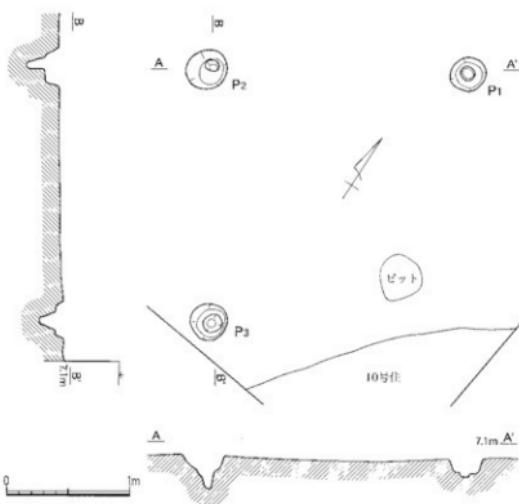
規模 桁行、梁行とも芯々間で
2.10mを測る。

主軸方向 南東-北西軸を基点とす
るとN-31°-Wを測る。

柱穴 P₁～P₃いずれも平面形
は略円形を呈し、径26～
33cm、深さ16～28cmを測
る。また、底面には中央
に一段深い径10～15cmの
小ピットを有している。

堆積土 基本上層IIa層を主体と
する暗褐色シルト。

時期 出上遺物もなく判断し難
いが、堆積土と土軸方位、
遺跡内の配置から奈良・
平安時代を推定すること
ができるよう。



第32図 1号掘立柱建物跡 (S B 1)

第3節 溝 跡

1号溝跡 (S D 1) (第33図、図版9)

位置 調査区南西に位置し、発掘区ではB・C-13～15区に位置する。

遺存状態 造構は基本土層III層上面で確認された。深さは70cmを測り、遺存状態は比較的良好である。

断面形 上部から緩やかに傾斜する「V字型」を呈するが、底部は逆台形状を呈し平坦である。

規模 幅1.50m、底部幅0.56m、現存長は約8.80mを測る。

走行方向 N-35°-Wを測る。

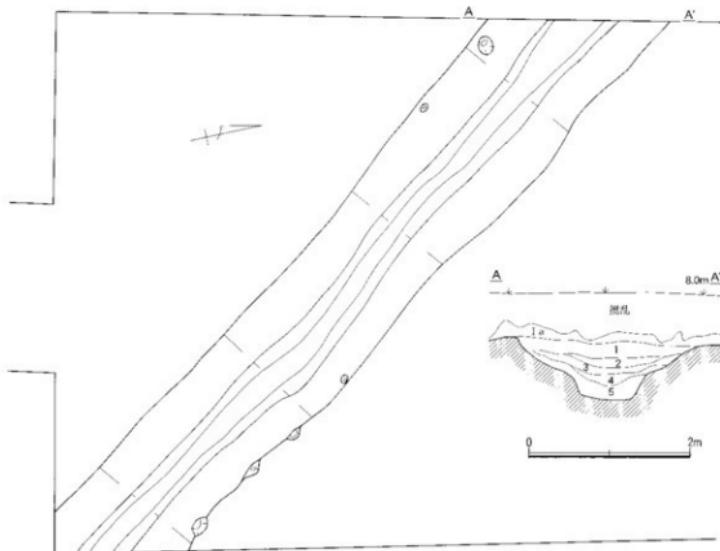
堆積土 5層に分層され、基本土層IIa層を中心とする土層が中心で、レンズ状の安定した堆積を示す。

出土遺物 (第34図、第13表、図版17)

堆積土中から土師器類が出土した。図示し得たのは土師器環1点・同甕5点である。その他に土師器環の破片が22点・同甕の破片が694点出土した。図示し得た1の土師器環は非ロクロ成形で、底部は丸底状を呈し、外面に明確な稜を持ち、口縁部は直線的に外傾する。内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。土師器甕はいずれも胴張り形で胸部の中央に最大径を有する。その中でも大形の4と6は口縁部と

胸部の境に段が形成される。栗團式に比定される資料と推定される。

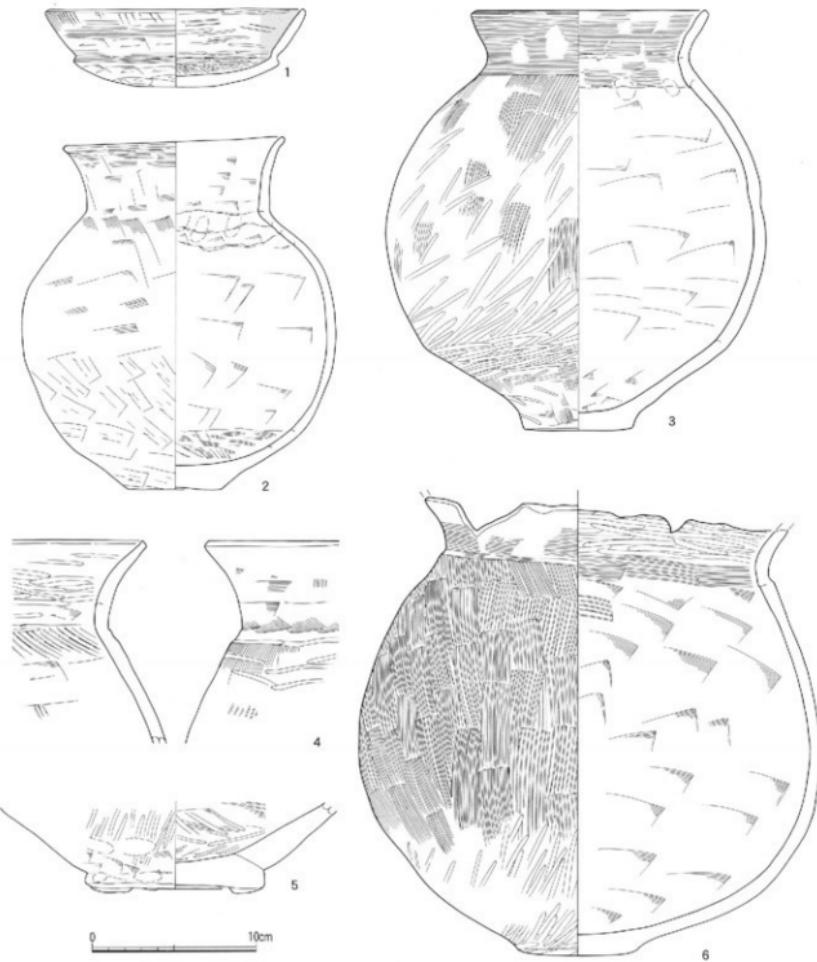
時 期 上記出土遺物より判断すると、おおよそ7世紀前半代の所産と推定される。



第13図 1号溝跡 (SD 1)

第13表 1号溝跡 (SD 1) 出土遺物観察表 (第34図、図版17)

番号	種別	層位	外観	内面	残存	透視図(cm)			写真図版	登録番号
						日 付	底 面	壁 面		
1	上 溝 跡	第5層	ヨコナメ・ハケメ→部分的にヘラナメ・ヘラケズフ→ヘラミナメ 黒褐色	コロナメ/4 堆積は薄	15.6		4.8	17	C-035	
2	土 壤 遺 墓	第2+3+5層	ハケメ・ヨコナメ・ハケメ ヘラナメ	コロナメ/1/2/3 堆積5/4 盛れ堆存	(13.9) (5.6~6.0)	5.8 6.8	21.6	17	C-036	
3	上 溝 跡	古2層	ヨコナメ・ハケメ→ヘラナメ 方舟・ヨコナメ	コロナメ/1/2 堆積3/4 盛り出物	(14.0) 6.6~7.0	23.7	17	C-037		
4	土 壤 遺 墓	第1+2層	ヘラナメ・ヘラケズフ→ヘラナメ	コロナメ→削断層/2段若干	—	—	—	17	C-038	
5	上 溝 跡	第1+2層	ヘラナメ・指ナメ・ヘラナメ・ヘラナメ・ヘラナメ 粘土付着	剥離下笠岩下 底部は盛り出物	—	—	11.0		C-039	
6	土 壤 遺 墓	第2層	ヨコナメ・ハケメ・下位はヘラナメ/ガキト段はハケメ ヘラケズフ	コロナメ/1/2 堆積5/6 底底堆存	(31.6)	7.2	28.0		C-040	



第34図 1号溝跡（SD 1）出土遺物

第4節 土 坑

1号土坑（SK1）（第35図、図版10）

位 置 調査区中央に位置し、発掘区ではII-3・4区に位置する。

遺存状態 近現代の耕作によって遺構の上部はほとんどが削平され、遺存状態は悪い。

平 面 形 不整方形ないしは台形状と考えられる。

規 模 長辺214cm、短辺190cm、深さ5cmを測る。

堆 積 土 1層で、炭化物をやや多めに含む黒褐色土で構成される。

出土遺物（第36図、第14表、図版17）

堆積土中から土師器・須恵器・鉄製品等が出土した。図示し得たのは土師器壺1点・同甕2点・須恵器壺1点・同甕1点・同蓋1点である。その他に土師器壺の破片12点・同甕の破片85点・須恵器壺の破片3点・同甕の破片10点・同甕の破片1点・鐵片2点が出土した。図示し得た1の土師器壺は非クロクロ成形で、丸底で内湾しながら立ち上がる。内面に一定方向のヘラミガキ後黒色処理が施してある。国分寺下層式に比定される資料である。4の須恵器壺は底部を回転ヘラ切りで切り離し、外周をヘラケズリ調整している。5の須恵器甕は口縁部のみ図示したが、同一個体と考えられる胸部破片が多数出土し、また2号土坑（SK2）から出土した胸部片と接合するものが存在する。

時 期 上記出土資料より判断すると、およそ8世紀前半代の所産と推定される。

2号土坑（SK2）（第35図、図版10）

位 置 調査区中央に位置し、発掘区ではII-3区に位置する。

遺存状態 近現代の耕作によって遺構の上部はほとんどが削平されており、遺存状態は悪い。

平 面 形 圓丸長方形を呈し、中央付近でやや窪む。

規 模 長軸232cm、短軸現存126cm、深さ5~14cmを測る。

堆 積 土 1層で、炭化物をやや多めに含む黒褐色土で構成される。

出土遺物 堆積土中から土師器甕の破片15点、須恵器甕の破片12点、輪の羽口片1点が出土したが、図示し得たものはない。なお、輪の羽口片は先端部が高熱により融解している。

時 期 出土須恵器甕の胸部片が1号土坑出土の須恵器甕の胸部片と接合するため、1号土坑と近似する時期と考えられる。

3号土坑（SK3）（第35図、図版10）

位 置 調査区中央より南側に位置し、発掘区ではK-7区に位置する。

遺存状態 他遺構との重複関係もなく、比較的良好である。

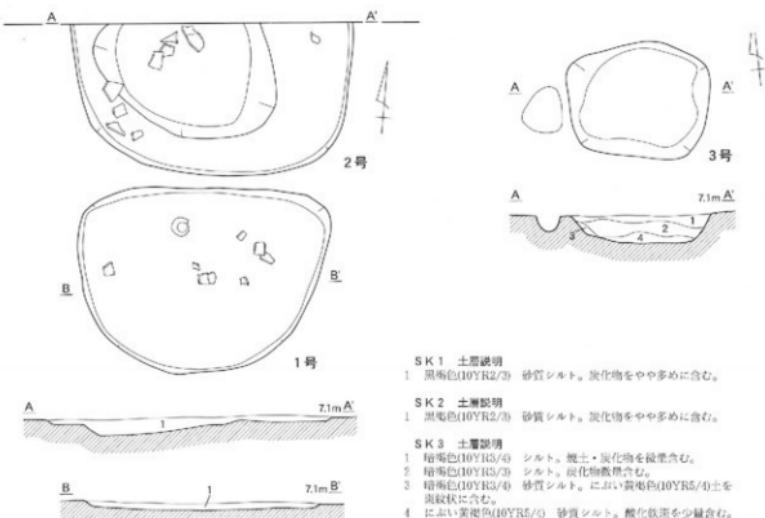
平 面 形 不整方形を呈する。

規 模 長軸118cm、短軸97cm、深さ24cmを測る。

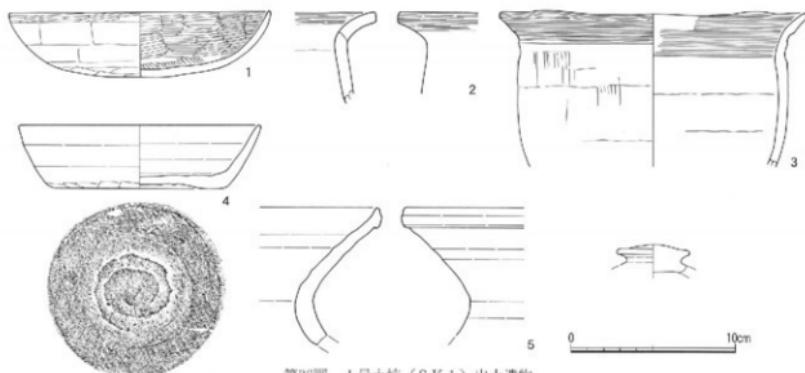
堆 積 土 4層に分層され、比較的安定した層序をなす。

出土遺物 遺物は出土していない。

時 期 詳細は不明である。



第35図 1～3号土坑 (SK 1～3)



第36図 1号土坑 (SK 1) 出土遺物

第14表 1号土坑 (SK 1) 出上遺物観察表 (第36図、図版17)

番号	種別	部位	外 面	内 面	残 有	法 量(cm)			写真図版	目録番号
						口 径	底 径	形 細		
1	土 膜 壁 板	埴輪土	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	口縁部～底部1/2弱	16.0	—	4.0	17	C-041
2	土 膜 壁 板	埴輪土	摩耗のため不明	摩耗のため不明	口縁部	—	—	—	—	C-042
3	土 膜 壁 板	埴輪土	ロコナデ ハケメ (厚耕のため不規則)	ココナデ ハナデ (厚耕のため不規則)	口縁部～全体1/4弱	18.5	—	—	17	C-043
4	須 絡 壁 板	埴輪土	ロクロナデ 回転ヘタ切り →外径下付持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底盤完形	14.8	11.0	3.9	17	E-013
5	須 絡 壁 板	埴輪土	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部	—	—	—	17	E-014
6	須 絡 壁 板	埴輪土	ロクロナデ	ロクロナデ	ツマミ部遺存	ツマミ径 4.4	—	—	—	E-015

第5節 堀 跡

1号堀跡 (S D - 2) (第38・39図、図版11)

本堀跡は、調査対象となった宅地内道路範囲の西側部分 C ~ E - 8 • 9 区と東側部分 J ~ P - 9 • 10 区で確認した西 東方向 (279° - 99°) の掘跡である。宅地造成範囲内の未調査部分の長さ 28m を含め、堀跡の推定延長距離は 61m を計測し、さらにその西側・東側とも造成計画範囲外に延びる。

C ~ E - 8 • 9 区の調査では、この部分の堀跡を全盤することができたが、J ~ P - 9 • 10 区では堀跡中央から南側が造成計画範囲外となるため、堀跡中央から北側の調査となつた。また、宅地内道路計画範囲の両側には既存の住宅が隣接する状況があり、堀底まで地表から 3m を超える堀跡を露天掘りによる発掘調査を行つた場合、調査区壁崩落及び隣接建物崩壊の危険が規定されるため、L - 9 • 10 区と N - 9 • 10 区に掘方向と直交する長さ 4m、幅 3m の深掘り区を設け、堀跡北側法面と部分的な底面の確認調査を行つた。なお、それ以外の部分の調査は、北側法面を確認面から 1m 以内で掘削し、堀方向の確認目的を主とした発掘を行つた。

第38図は C ~ E - 8 • 9 区の堀跡平面図、第39図 A - A'、B - B' は堀跡堆積土及び横断面である。堀跡の確認面は基本層序 II a 層上面である。堀跡の規模は上端幅 7.6 ~ 8.1m、底面幅 2.0 ~ 2.2m、深さ 2.45m を測り、横断面の形状は逆台形を基本とし、底面はほぼ平坦で西から東にわずかに傾斜する。

北側法面角度と南側法面角度に異なりがあり、北側法面では標高 4.7m の底面から 0.5m 上部の標高 5.2m までが仰角 60°、幅 0.5m の犬走状のテラスを介して標高 5.9m までが仰角 50°、幅 0.6m 前後の 2 段目の犬走状テラスから標高 6.5m までが仰角 60°、それより上部から上端までは仰角 50° を計測し、法面角度に 5 箇所の変換点が認められた。また、1 段目の犬走状テラス中央から東側には上端幅 0.4m、底面幅 0.2m、深さ 0.2m 前後で底面がわずかに東側に傾斜する溝が掘り込まれている。

南側法面は北側法面に比べ傾斜角度が緩やかで、犬走状のテラスは明確でなく法面角度の変換点を形成する程度であり、法面角度は標高 4.85m の底面から標高 5.6m までが仰角 48°、標高 6.3m までが仰角 40°、さらに上端までは仰角 35° を計測する。

堆積土は、第39図 A - A' に示すように 45 層に分層した。4 ~ 7 層は堀跡の埋没過程の最終段階を示し、基本十層 I 層、現在の畑地耕作土に近い内容を示す。8 層は北側からの流入あるいは投棄とも考えられ、ブロック状を呈しており、これは堀跡北側に存在した土壠の崩落土と推定することも可能であり、以下の 9 ~ 12 層も内容物から 8 層と同様な堆積要因が推定できる。

16 ~ 19 層は標高 6.3m の位置にはほぼ平行に堆積している。層の上端と下端には 1 ~ 3mm 程度の酸化鉄の薄層が付着して極めて硬質であり、ある時点での地下水位を示している可能性を指摘することができる。

25 層の堆積後に木堀跡は掘り替えがなされた形跡が確認でき、この掘り替え後の底面は初期底面の 0.3m 上部の 37 層まで掘り込まれている。

20 層以下 45 層までの堆積は砂質シルトを主体とした壁崩落土を主要因とし、洗い出された砂粒と砂質シルトの薄い互層からなるラミナが発達することを特徴とし、36 ~ 37 層では有機質の発達する部分も認められた。

第38図は L - 9 • 10 区の堀跡法面北側の平面及び横断面である。標高 6.95m の II a 層上面が確認面であり、底面は標高 4.62m を測り、確認面からの深さ 2.33m を計測する。C ~ E - 8 • 9 区の堀跡と一連の遺構であり、堆積土はほぼ同様、底面比高差は当該地点がわずかに 0.05m 低い状態である。

北側法面の角度は 5 箇所の変換点を有し、底面から標高 5m までが仰角 70°、5.35m までが仰角 60°、6.36m までが仰角 35° であり、この部分に幅 0.3m の犬走状テラスを有し、テラスより上端部までが仰角 40° を計測し、C ~ E - 8 • 9 区北側法面とほぼ同様な断面形状を呈する。

なお、K・L-9区では12・13号住居跡と重複関係を有し、本掘跡が住居跡を壊して構築されていた。

出土遺物（第37図、第15表、図版17）

本掘跡からは第37図に示した遺物のほかに土器片が少量出土しているが、いずれも堆積土上層からの出土である。また、12号住居跡出土上器と接合する破片が認められることにより、これらの堆積土上層出土遺物は本掘跡と重複関係を有する住居跡から埋没過程にある本掘跡に流入したと推定できる。

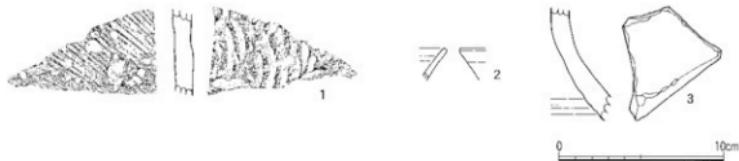
1はL-9・10区掘跡上層から出土した須恵器甕の破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円状のタタキが整形される。焼成は古く、灰白色を呈し、胎土には気泡が目立つ。

2は中国龍泉窯系青磁碗の口縁部細片である。C-E-8・9区、確認面から2m下部の堆積土下層から出土した。内面にヘラ状工具による片彫り沈線が施された龍泉窯碗I-4類に分類（山本 2000）できる12世紀中頃～13世紀前半の製品である。

3は常滑窯の肩部破片である。L-9・10区、確認面から2m下部の堆積土下層から出土した。口縁部を欠損するため明確な時期を示すことは難しいが、肩部形状や胎土の特徴から中世後半、15～16世紀代の製品と推定できよう。

時期

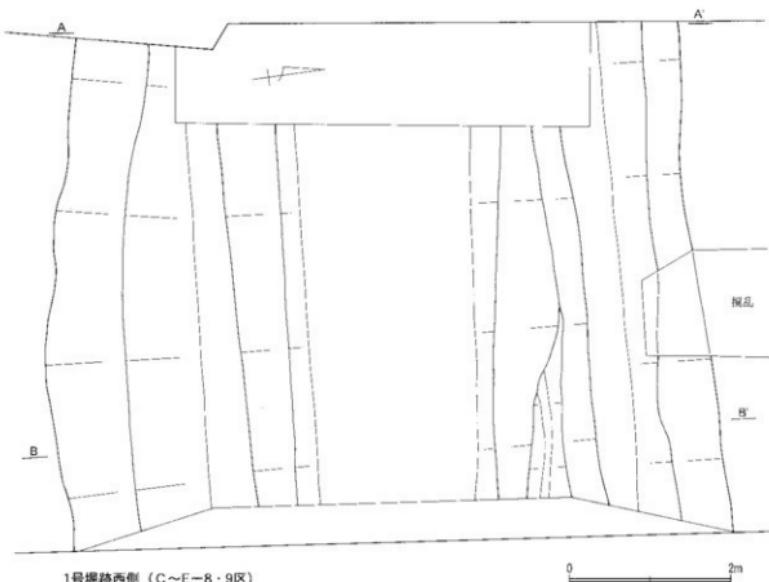
堀跡下層からの出土遺物は12世紀中頃～13世紀前半の龍泉窯系青磁碗の細片と中世後半期の常滑窯片のみであり、堀の時期を確定することができない。ただし、この掘跡は前田鉢跡の南側を画する堀であったと考えられ、文献に残る前田鉢跡の歴史的背景から考えれば、現時点では出土陶器類の年代幅である12世紀中頃～16世紀代の時間幅でその時期を想定できよう。



第37図 1号堀跡（SD 2）出土遺物

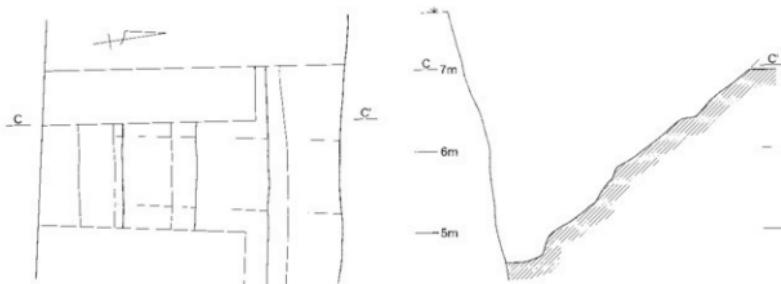
第15表 1号堀跡（SD 2）出土遺物観察表（第37図、図版17）

番号	種別	層位	外 面	内 面	底 存	寸				写真版	登録番号
						口	底	底	内		
1	須恵器 甕	堆積土	平行タタキ	同心円タタキ	鉢底小凹	-	-	-	-	E-012	
2	青 瓷	堆積土	ロクロナデ	ロクロ ヘラ状工具による 片彫りあり	12世紀～13世紀 龍泉窯碗I-4類	-	-	-	17	J-001	
3	青 瓷	堆積土	タテ	ナデ	薄底若干	-	-	-	-	I-002	



1号堀跡西側 (C~E-8・9区)

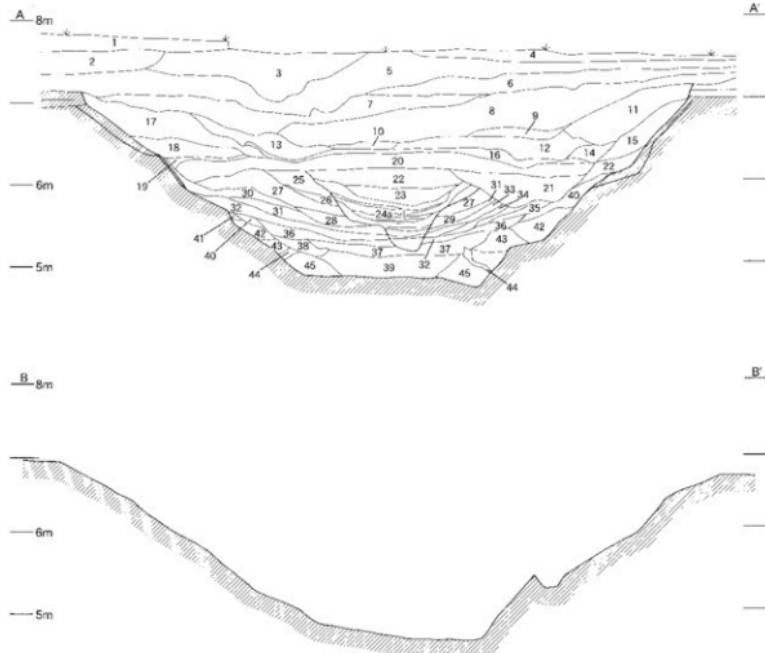
0 2m



1号堀跡東側 (L-9・10区) 北法面

第38図 1号堀跡 (S D 2)

- 1 淡黄色(10YR8/0) 砂地層。塊代。砂質シルト。
2 淡灰色(10YR0/4) 砂地層。塊代。上面に鉛灰。砂質シルト。
3 淡灰色(10YR1/5) 滲在の水溶け込み塊。酸化物。
4 暗緑灰色(5.5YR7/1) 泥土層。下部に酸化鉄の浮遊。漂集。基土序上異。
5 暗褐色(5.5YR7/3) 砂質シルト。葉色は灰白。酸化物混在。腐相部。
6 にひい緑色(7.5YR5/3) 砂質シルト。底10mmの灰色粒子少量混じる。
7 にひい緑色(7.5YR5/3) 砂質シルト。底5~20mmの灰白色・底30mmの大粒砂・底3~8mm大の褐色砂質シルトブロック等の混合土。全体ブロック状(土壌の崩れの可塑性高い)。
8 暗緑色(7.5YR6/2) 砂質シルト。底3~8mm大の暗灰色・3~5mm大の褐色砂質シルトブロック。
9 暗褐色(7.5YR6/2) 5層より疊積。砂質シルト。
10 にひい黄褐色(10YR6/3) 砂質シルト。底5~8mm大の暗灰色・底10~30mm大の褐色砂質ブロックの混合土。部分的に酸化。
11 にひい黄褐色(10YR6/2) 砂質シルト。底5~20mm大の暗灰色・底5~8mm大の褐色砂質ブロック。9~12層も上層部同様。



第39図 1号掘跡 (SD 2) C ~ E - 8・9区堆積土及び断面図

- 13 黒色(NsI) 砂質シルト。基色は灰褐色。全体に膠化現み、にほい灰褐色。肩左(4)下部に灰~暗灰色の5~10mm厚の砂質シルトブロック。
 14 黒色(NsI) 砂質シルト。基色は灰褐色。膠化進行して、にほい灰褐色。
 15 にほい黄褐色(10YR6/5D) 砂質シルト。
 16 黑色(NsI) 砂質シルト。肩の上部・下部は1~3mm程度の酸化鉄付層。褐鐵質。
 17 にほい黄褐色(10YR6/4) 砂質シルト。樹脂に膠化現;肩灰斑块。
 18 にほい黄褐色(10YR6/3) 砂質シルト。
 19 黑色(NsI) 15cmに類似。肩の上部・下部に膠化現の麻薺付苔(薄葉)。樹脂質。
 20 黑色(NsI) シルト味強い膠質シルト。樹脂に酸化鉄。僅5~20mm大的黃灰色・褐色砂質シルトブロック状。斑状。
 21 暗灰色(GYR6/1) シルト味強い膠質シルト。根茎に膠化現(タカソコヅク)。膠化現のため全体的に褐色にじむ。
 22 黒色(NsI) 20cmより胶り弱い。
 23 暗灰色(10G6/1) 砂質シルト。有機物多い。
 24 暗緑灰色(GH7/1) a ~ 1.5cm分層。僅5~10mm大程度の膠質シルトと砂からなる互層。ラミナ形成。25層堆積後の割り替え部の堆積。
 25 暗青灰色(GH4/1) シルト味強い膠質シルト。僅5~10mm大的暗青灰色・褐灰色シルトブロックの混合土。根根膠化。
 26 胶質灰色(10G6/1) シルト味強い膠質シルト。
 27 暗青灰色(10G6/1) 砂質シルト。僅5~10mm大的暗青灰色・褐灰色シルトの混合土。根根膠化。
 28 暗緑灰色(G4/1) 砂質シルト。僅5~10mm大的暗緑灰色。
 29 暗緑灰色(G4/1) 胶質現するが中弱い。
 30 黑色(BS5/1) 胶質現の砂質シルト。
 31 黑色(BS5/1) 50cmより泥炭化強い。10mm以上幅のラミナ。
 32 黑青灰色(10L3/1) 奈干葉味あり。さらに泥炭化強く、5~10mmのラミナ。
 33 黑灰色(5G6/1) 味強い。砂質シルト。
 34 黑色(Y7Y3/1) 砂質シルト。
 35 暗灰色(7Y4/1) 砂質シルト。
 36 黑青灰色(GT3/1) 泥炭株ある砂質シルト。3~5mm厚のラミナ。
 37 オリーブ色(10Y6/2) 有機質を含む砂質シルト。
 38 青灰色(10G6/1) シルト味強い砂質シルト。
 39 黑灰オリーブ色(2GY3/1) シルト味強い砂質シルト。
 40 青灰色(10G6/1) 砂質シルト。
 41 青灰色(10BG6/1) 砂質シルト。10cmより味強い。
 42 暗緑灰色(10G6/1) 砂質シルト。2~4mm厚の砂質シルトと砂の互層。ラミナ形成。
 43 明緑灰色(10G6/2) 3~5mm厚の砂質シルトと砂の互層。ラミナ形成。
 44 オリーブ灰(10Y4/2) 37層が貫入。粗あるいは地割れのため。
 45 暗緑灰色(10G5/1) 砂とシルト味強い砂質シルトとの互層。5~20mm厚のラミナ形成。

第Ⅲ章 まとめ

今回の発掘調査によって、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑3基、及び中世の前田館跡との関連が想定できる堀跡1条を検出した。

古墳時代後期半～平安時代の遺構の内訳は、古墳時代後期後半が竪穴住居跡3軒（3・4・6号住）・溝跡1条（1号溝）、奈良時代は竪穴住居跡4軒（1・2・11・13号住）・土坑2基（1・2号土坑）、平安時代では竪穴住居跡5軒（5・7～9・12号住）である。また、時期を示す遺物が出土していない10号住居跡・1号掘立柱建物跡・3号土坑については、奈良～平安時代の時間幅でその時期を推定することが可能である。

古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡数は、調査範囲内では突出する時期は認められず、遺構相互の重複関係は少なく、時期毎の分布は比較的散漫で分散的である。

出土遺物は、竪穴住居跡と溝跡から出土した土師器・須恵器・土製品（管状土錐）が主体であるが、9号住居跡及び1号溝跡以外では出土量が比較的少なかった。9号住居跡のカマド周辺からは細身の管状土錐が17点とまとまりをもって出土し、当時の当該地における生業に関する一端を示す遺物として注意される。

前述したように時期毎の竪穴住居跡分布は散漫で分散的であるが、古墳時代後期後半から平安時代前半まで断続的にではあるが集落（竪穴住居）が存続していた状況が推定でき、名取川右岸の自然堤防上の微高地の集落構成が散在・分散的ではあったとしても、本調査地点を含めた周辺地域が集落を営むに適地であったと考えられる。

中世の前田館跡に関連すると推定できる幅8mの堀跡は、獨旨範囲の南側を東～西に延び、調査範囲内での延長距離は61mを測るが、両端はさらに調査区外に延びていた。

この堀跡は前田館跡の南側を東～西に区画する外堀跡を構成する遺構と考えられ、館跡の一端が明らかになった点は一つの成果であるが、調査面積が狭いため堀跡の全体構造を把握するまでは至っていない。また、出土遺物も、中世に属するものは、中世龍泉窯系青磁碗（青磁碗I～4類 12世紀中葉～13世紀前半）と、15～16世紀代と推定できる常滑焼片の2点のみであり、これをもってこの堀の構築・機能時期を確定することはできない。

ただし、文献資料から見た前田館跡の歴史背景から考えれば、出土陶磁器類の年代船である12世紀中葉～16世紀代の時間幅内でその時期を想定することは可能であろう。また、この堀跡は中期まで埋没した時点で掘り替えが行われており、比較的長期にわたって使用されていた可能性を窺うことができる。

前田館跡に関する発掘調査は今回が初例である。内容的には外堀跡の部分的な確認であり、その構造や内容については不明確な点が多い。また、文献資料との照合・検討は行っておらず、今後の課題と言える。

引用・参考文献

- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14輯 東北史学会
- 氏家和典 1961 「土器」『陸奥国分寺跡』陸奥国分寺跡発掘調査委員会
- 氏家和典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底窓をめぐって」『松倉亮吉教授還暦記念論集』
- 紫穂正隆 1974 「史料 仙台領内古城・館」第四巻 宝文堂
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡川土上器の変遷」『研究紀要VI』宮城県多賀城跡研究所
- 加藤道男 1989 「宮城県における七郎岩研究の現状」『考古学論叢』II 宇栄社
- 木本元治 1990 「南東北地方における歴史時代の須恵器編年I」『考古学古代史論叢』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 山本信夫 2000 「陶磁器分類編」『大宰府条坊跡XV』大宰府市教育委員会
- 吾妻俊典 2001 「多賀城周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究』古代の土器研究会
- 田中則和 2001 「鎌倉・南北朝期における仙台平野の墓域とその周辺」『六軒丁中世史研究』第8号 東北学院大学中世史研究会
- 宮城県教育委員会 1981 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集
- 仙台市教育委員会 1994 『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集
- 仙台市教育委員会 1994 『南小泉遺跡—第22次・23次発掘調査報告書一』仙台市文化財調査報告書第192集
- 仙台市教育委員会 1998 『南小泉遺跡—第26次発掘調査報告書一』仙台市文化財調査報告書第225集
- 東北考古学会 1976 『東北考古学の諸問題』
- 仙台市 1995 『仙台市史 特別編2 考古史料』仙台市史編さん委員会
- 仙台市 2000 『仙台市史 通史編2 古代中世』仙台市史編さん委員会
- 宮城県の地名 1987 『日本歴史地名人系 第四巻』平凡社

図 版

図版 1



遺跡遠景（上空東から）



遺跡全景（上空から）

図版 2



1号住居跡（S I 1）全景（西から）



1号住居跡（S I 1）北東隅部床直遺物出土状態



1号住居跡（S I 1）北西隅部鐵製紡錘車出土状態



2号住居跡（S I 2）全景（南東から）



2号住居跡（S I 2）カマド周辺の遺物出土状態

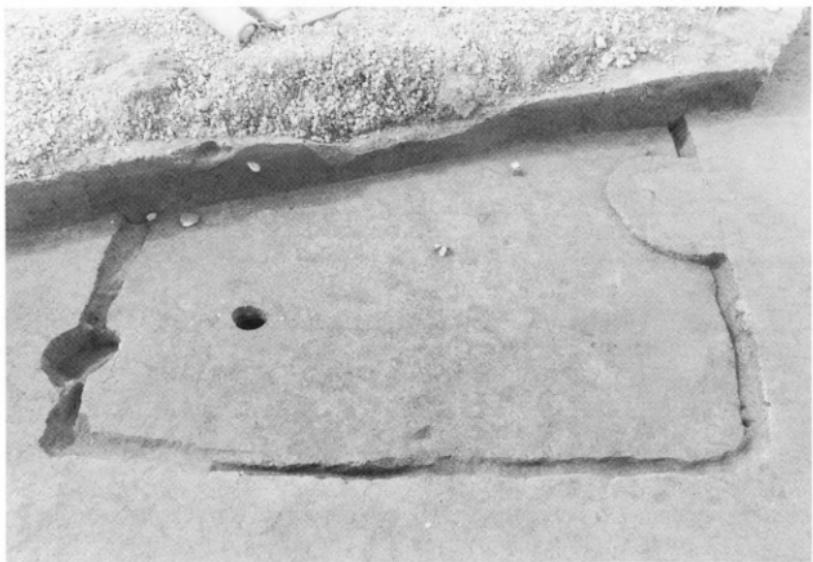


2号住居跡（S I 2）カマド



3号住居跡（S I 3）全景（西から）

図版 4



4号住居跡（S I 4）全景（北東から）



5号住居跡（S I 5）全景（北東から）

図版 5



4号住居跡（S I 4）堆積土状態



5号住居跡（S I 5）堆積土状態



4号住居跡（S I 4）カマド



5号住居跡（S I 5）カマド

図版 6



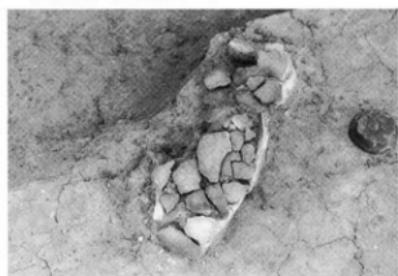
6～8号住跡（S I 6～8）全景（南から）



6号住跡（S I 6）カマド



6号住跡（S I 6）土師器破出土状態



6号住跡（S I 6）土師器破出土状態



6号住跡（S I 6）須恵器破出土状態



9号住居跡（S I 9）全景（西南西から）



9号住居跡（S I 9）カマド



9号住居跡（S I 9）南東隅部疊集横状態



9号住居跡（S I 9）遺物出土状態（真上から）



9号住居跡（S I 9）遺物出土状態（南西から）

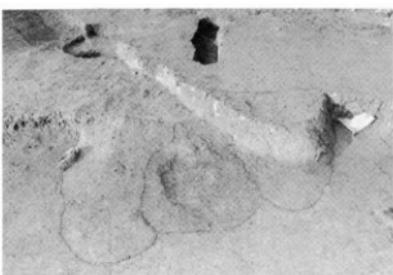
図版 8



11~13号住居跡 (S I 11~13) 全景 (南東から)



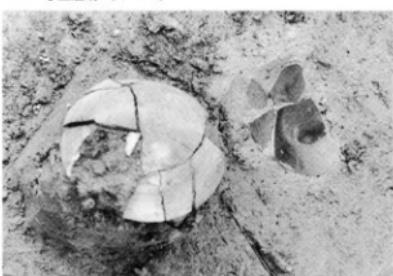
11号住居跡 (S I 11) カマド



12号住居跡 (S I 12) カマド



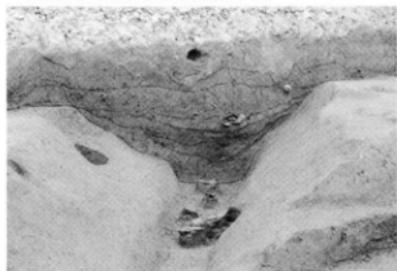
13号住居跡 (S I 13) カマド



12号住居跡 (S I 12) 土師器環出土状態



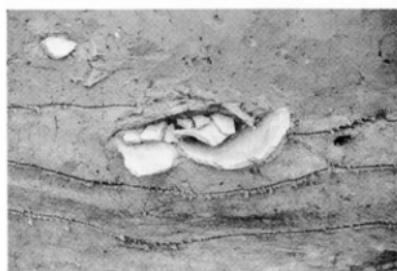
1号溝跡（SD 1）全景（南東から）



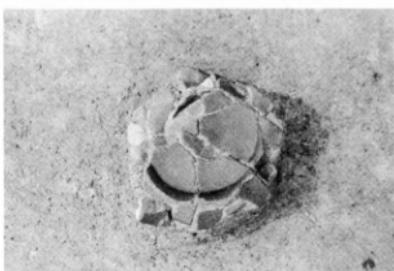
1号溝跡（SD 1）堆積土状態



1号溝跡（SD 1）上～中層土器出土状態



1号溝跡（SD 1）地積土 2層土器出土状態



1号溝跡（SD 1）下層土器破片出土状態

図版 10



1・2号土坑（SK1・2）全景（東から）



3号土坑及びK-7区周辺の遺構検出状態（北から）

図版 11



1号掘跡（SD 2）西側及び堆積土状態（東から）



1号掘跡（SD 2）北法面大走り（南西から）

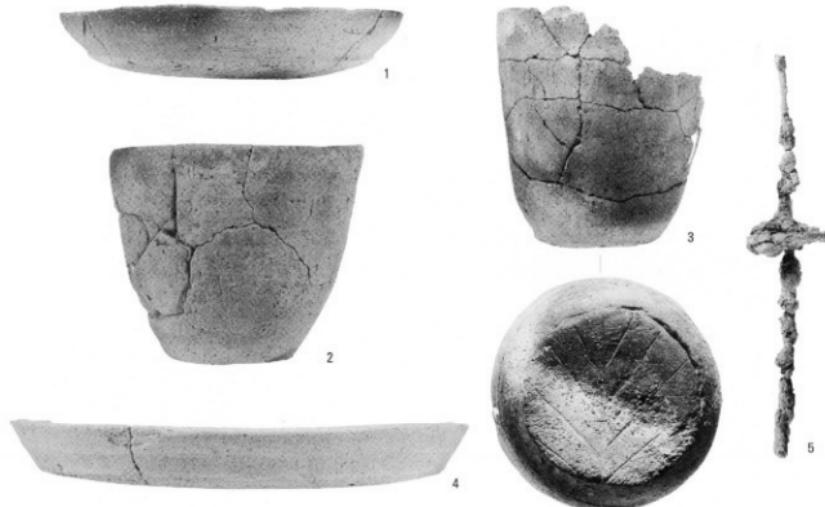


1号掘跡（SD 2）北法面大走り・溝（西から）

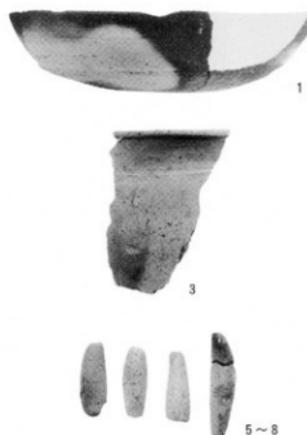


1号掘跡（SD 2）東側（東から）

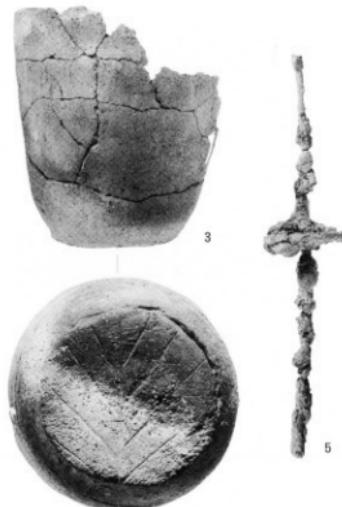
図版 12



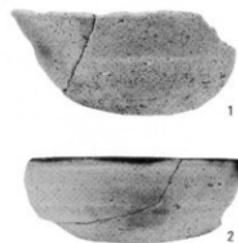
1号住居跡（S I 1）出土遺物



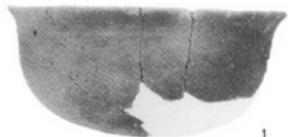
2号住居跡（S I 2）出土遺物



4号住居跡（S I 4）出土遺物



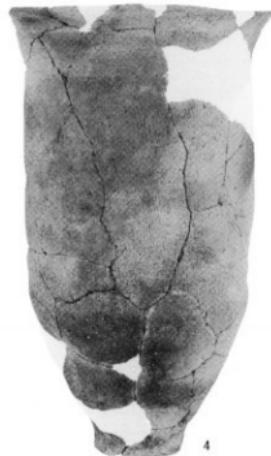
5号住居跡（S I 5）出土遺物



1

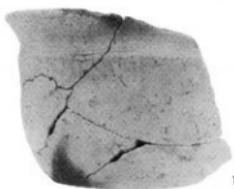


3



4

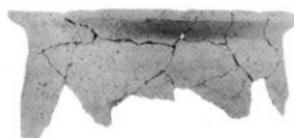
3号住居跡（S I 3）出土遺物



1

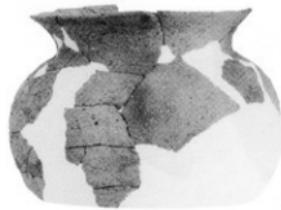


4



3

7号住居跡（S I 7）出土遺物



6

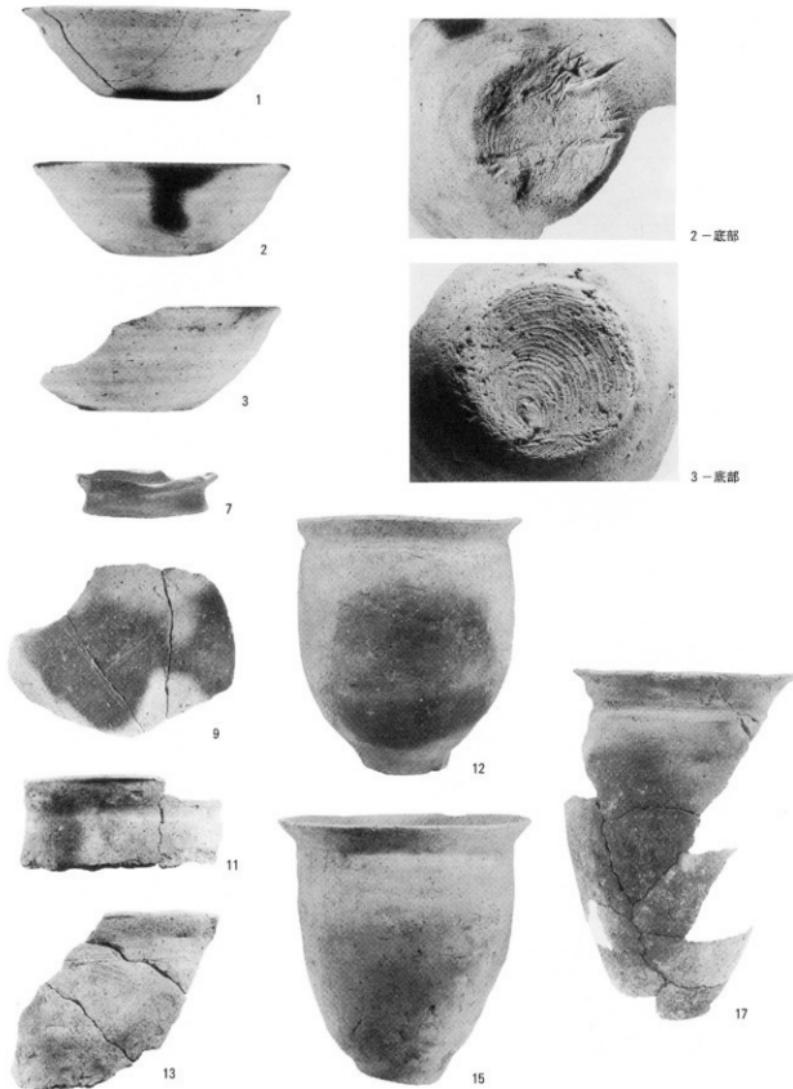
6号住居跡（S I 6）出土遺物



1

8号住居跡（S I 8）出土遺物

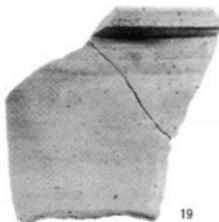
図版 14



9号住居跡（S 1 9）出土遺物（1）



18



19



20



21

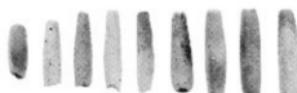


23

26



24



28~36



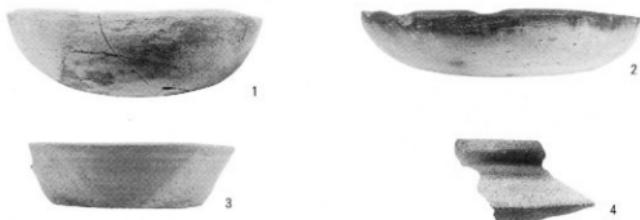
25



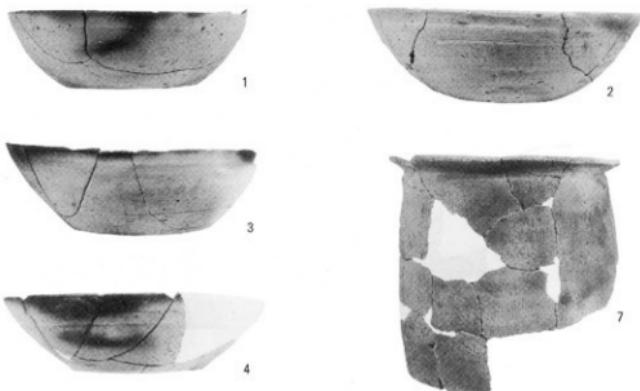
37~44

9号住居跡（S19）出土遺物（2）

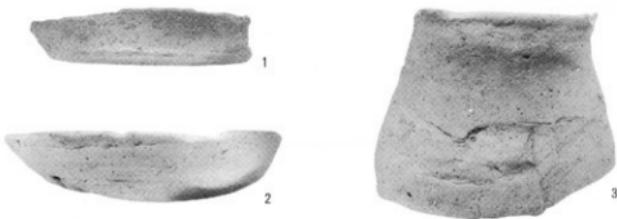
圖 版 16



11号住居跡（S I 11）出土遺物



12号住居跡（S I 12）出土遺物



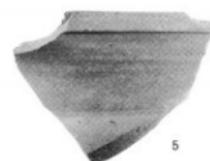
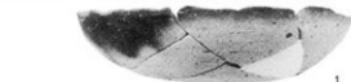
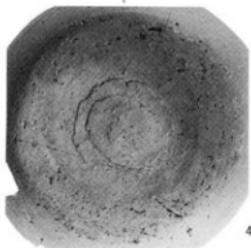
13号住居跡（S I 13）出土遺物



1号溝跡（SD 1）出土遺物



1号柵跡（SD 2）出土遺物



1号土坑（SK 1）出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だんのこしいせき はっくつちょうさにうこくしょ						
書名	壇腰遺跡 発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第277集						
編著者名	彦部弘美・小林義典・伊東喜古						
編集機関	仙台市教育委員会						
発行機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3-7-1 TEL 022-214-8893・8894						
発行年月日	西暦 2004年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原図
壇腰 宮城県仙台市太白区 中田七丁目129外	04100 仙台市 C-139	38° 11' 19"	140° 53' 13"	20030825 20031023	約1,000	宅地造成に伴う 事前調査	
所収遺跡名	種別	その時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
壇腰	集落	古墳時代後期 ～平安時代	堅穴住居跡 獨立柱建物跡 溝 窓 土坑	13軒 1棟 1条 3基	七輪器・須恵器・ 管状土器	自然堤防上の 集落跡	
	館跡	中世	基 破	1条	龍泉窯系青磁片・ 常滑窯片	前田駿跡南側 を区画する東 ～西方向の外 堀を確認	

壇腰遺跡

－発掘調査報告書－

発行日 2004年3月31日
発行 仙台市教育委員会
印 刷 ツルミ印刷株式会社

